

## 2-7. 奥浜名湖の社寺と祭礼にみる歴史的風致

### (1)はじめに

遠州と呼ばれた浜松市一帯は、東海道のほぼ中央に位置し、遠州の奥座敷である奥浜名湖地域は、東海道から分岐する姫街道(本坂通)<sup>ひめかいどう ほんざかどおり</sup>が通り、東海道沿いの地域同様、東西文化・歴史の橋渡しとして重要な役割を果たしてきた場所であり、歴史に名をなした芸術家や武将がその一帯に足跡を残している歴史深い地である。

奈良時代から江戸時代には、土地の有力者や街道を通る有力者との縁もあり、現在にも残る社寺が開創・建立され、庇護され、これらの名所・旧跡は、当時のまま大切に現代に引き継がれ、土地に根差した様々な行事とともに、奥浜名湖の自然のなかで大切に守られてきた。

また、奥浜名湖地域は、市内を通る姫街道<sup>ひめかいどう</sup>の西の端に位置する。当地には、一見すると様々な宗派の寺院や神社などの宗教施設が立地し、これらの共通性を見出すことは難しいが、その社寺などの開設年代に着目すると、社寺に代表される信仰などの文化が、西から伝播したことを如実に物語っている。古来より、日本における文化の伝来は、大陸を通して、多くの場合西側諸国から入り、

古代からの東海道沿いは、西(京)から東へ伝播している。奥浜名湖地域においても、口碑によると伊勢内宮の創設の由緒となった浜名惣社神明宮<sup>はまな そうしゃしんめいぐう</sup>は奥浜名湖地域の最も西側の三ヶ日<sup>みつ かび</sup><sup>1</sup>に位置し、その後、古代には密教の摩訶耶寺・大福寺が三ヶ日に開設され、中世になると、引佐には禅宗の方広寺<sup>ひなざ</sup>が開設され、同じく引佐の龍潭寺も禅宗となった。そして近世には細江に黄檗宗の宝林寺<sup>ほうりんじ</sup><sup>2</sup>が開設される

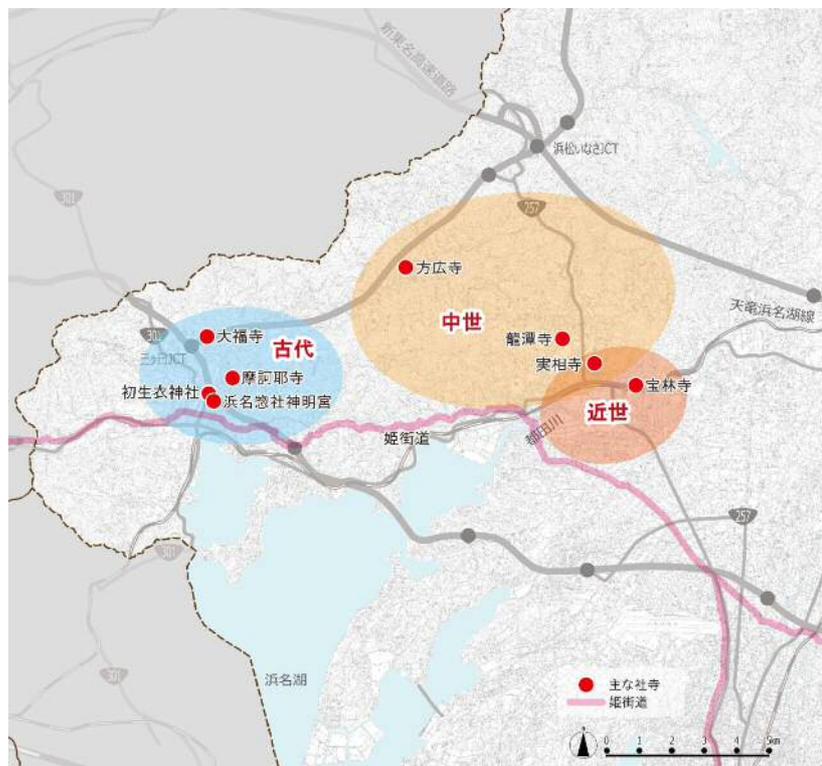


図2-7-1 奥浜名湖地域における信仰や社寺等文化の伝播の概略図

<sup>1</sup> 三ヶ日、三ヶ日町の表記について、昭和30年(1955)から平成19年(2007)までは三ヶ日と表記したが、ここでは年代による区別はせず、三ヶ日と表記する。

<sup>2</sup> 宝林寺の表記について、正確には寶<sup>ほう</sup>の字を用いるが、宝の字を用いて宝林寺と記載している場合もある。この章では、「宝林寺」の記載を使用する。

というように、信仰とその社寺建築や文化が西から東へ伝播し、奥浜名湖地域特有の宗教空間が作りあげられている。また、ここを舞台に、これまで大切に守り続けられてきた祭礼等が、少しずつ形を変えつつも、毎年行われ、歴史と伝統を今に伝えている<sup>1</sup>。

## (2)三ヶ日町三ヶ日の社寺と祭礼にみる歴史的風致

### ①三ヶ日町三ヶ日地区について

天竜浜名湖鉄道の三ヶ日駅が位置するこの地区は、浜名区三ヶ日町の中心部ともいえる地域で、北側は大輪山をはじめとする山々、南側は浜名湖の一部でもある猪鼻湖に挟まれた場所に市街地を形成しており、江戸時代には姫街道の宿として三ヶ日宿が置かれた。

また、この地は、伊勢神宮と関わりの深い地域で、浜名惣社神明宮や初生衣神社が位置し、伊勢神宮の荘園が置かれた地でもあり、古くから人々が生活を営み、祭礼を行い、この地域の中心部として発展してきた地区である。

### ②歴史的風致を構成する建造物

#### ア.浜名惣社神明宮

浜名惣社神明宮は、浜名区三ヶ日町三ヶ日の大輪山に鎮座し、天照皇大御神を御祭神として祀っている。境内には、天羽槌雄命・天棚機媛命・太田命を祀る三社の摂社と、須佐之男神社・浜名天満宮などの八社の末社も祀られている。

当地は、平安時代から中世にかけて伊勢神宮の荘園である御厨が置かれるなど伊勢神宮と関わりが深い地域である。

浜名惣社神明宮は、延喜式内社<sup>2</sup>である「浜名郡英多神社」と考えられており、この地の豪族である浜名県主がその祖先神を祀っていたが、伊勢神宮領になった際、神明宮になった。

浜名惣社神明宮の本殿は、板倉形式(井籠造)という古い建築様式で、重要文化財(建造物)に指定されている。本殿の大きさは、桁行1間(3.1メートル)、梁間1間(2.3メートル)。屋根は神明造と呼ばれる様式で、棟持柱と屋根に千木、勝男木を置いており、茅葺、切妻造平入りの建物である。

現本殿は、昭和60年(1985)から保存修理工事の調査に入り、昭和61年(1986)から62年(1987)にかけて、解体後、可能な限り解体古材を再使用し、復元再建工事が行われたものである。この工事の際に現



図2-7-2 浜名惣社神明宮本殿

<sup>1</sup> 本歴史的風致に関する記述は、『次世代に伝える 姫街道 見付 市野 浜松 気賀 三ヶ日 嵩山 吉田 御油』(姫街道未来塾編集実行委員会)などの書籍も参考にして記載した。

<sup>2</sup> 延喜式の神名帳に登載された神社のこと。『延喜式』は、平安時代に編纂された、朝廷の律令法(式)の施行細則が記されたもので、巻9・10の「神名式」のことを「神名帳」といい、そのなかに全国の式内社一覧が書かれている。

存していた本殿の建立は、『静岡縣神社志』(昭和 16 年(1941))によると正徳 3 年(1713)となっている。最も古い棟札としては文政 7 年(1824)の修理棟札が残っている。昭和期の修理の際の記録等を記した『静岡県指定文化財 浜名惣社神明宮本殿及び摂社天羽槌雄神社 保存修理工事報告書』(平成 2 年(1990))によれば、文政 7 年(1824)以降、その後概ね 20 年ごとに茅葺替えが行われ、大正 9 年(1920) 4 月葺替えののち、昭和 36 年(1961)に破損したあとは、茅葺の上に鉄板葺きの工事が施され、しばらくそのままの状態でも保存されていた。これを、昭和 60 年(1985)に本殿改築委員会を立ち上げ、保存修理工事に至ったものである。

浜名惣社神明宮では、8 月の第 1 金曜・土曜及び日曜には例祭が斎行され、舞や花火の奉納、屋台巡行などが行われている。

また、伊勢神宮にみかんの献納をするための三ヶ日みかん献納祭が行われるほか、初生衣神社のおんぞ祭りの際、摂社天棚機媛命社にて神御衣を預かるなど、伊勢神宮と関わりのある行事も行われている。

### イ.初生衣神社

初生衣神社は、機織の神、天棚機媛命を祭神とする神社で、古来より三河の赤引の糸で神御衣を織って伊勢神宮に奉獻してきたと伝わる。明治期以降は途絶えていたが、昭和 43 年(1968)に神御衣の奉獻を復興し、4 月の第 2 土曜には、例祭(おんぞ祭り)を行っている。遠州織物発祥の地と言われ、境内には織殿があり、古式の織具一式を所蔵している。

織殿は、桁行 3 間、梁間 2 間、切妻造茅葺で、棟には千木を置き、棟押えをのせる。現在の建物は享和元年(1801)の建造とされており、昭和 44 年(1969) 2 月 14 日には当時の三ヶ日町により、町の指定文化財に指定されている。また、『初生衣神社略記<sup>2</sup>』によれば、浜名惣社神明宮本殿と同じ井籠造という建築様式であったとされている。



図2-7-3 初生衣神社境内(中央が本殿、右が織殿)

## ③三ヶ日町三ヶ日に見られる活動

### ア.おんぞ祭り

#### a.おんぞ祭りの歴史

おんぞ祭りは、御衣を織って皇太神宮(伊勢神宮内宮)に奉獻する、800 年余りの伝統を誇る行事で、現在は、毎年 4 月の第 2 土曜に行われている。初生衣神社の中央には、高天原で神御衣を織っていたとされる機織の神「天棚機媛命」が祀られている。また、境内にある織殿

<sup>1</sup> 三河は、上質な「赤引の糸」を産出した。赤引の糸の「赤」は、「明」のことで、光って美しく清浄な糸をさす。また、「赤引」は地名で、三河の大野(現愛知県新城市)付近であったとも言われている。

<sup>2</sup> 以前の宮司が記した初生衣神社の由緒などを記した記録

の内部には、「古式機」(いざり機)があり、古来より、「伊勢の神宮に神御衣<sup>かんみそ</sup>を納める」という役割に基づき、三河の赤引の糸で神御衣<sup>かんみそ</sup>を織り、伊勢神宮に奉獻してきた。

『しずおかの文化』によれば、「神御衣<sup>かんみそ</sup>は神服部<sup>かんほとりけ</sup>家の女性が川で禊をし、機織をしていたと伝えられている。織られた神御衣<sup>かんみそ</sup>は「太一御用」の旗を立てて伊勢神宮に調進される行事「御衣祭り」が行われていた。」とある。明治期以降は途絶えていたが、昭和43年(1968)、「初生衣神社おんぞ奉賛会<sup>うぶぎぬ</sup>」が結成され、明治百年を記念して神御衣<sup>かんみそ</sup>の奉獻を復興した<sup>1</sup>。

### b.おんぞ祭りの流れ

古記録によると、伊勢神宮に奉獻される神御衣<sup>かんみそ</sup>は、神職により11月吉日から織り始められたという。

『静岡県の祭ごよみ』には「古記録によると、…(中略)…生糸が納められると、神服部夫婦は一週間の齋戒沐浴をした後、十一月の吉日を選んで織殿に籠り、一日でこれを織り上げた」と記されているが、現在は初生衣神社が神御衣<sup>かんみそ</sup>を用意している。平成31年(2019)4月のおんぞ祭りまでは、出来上がった絹織物を取り寄せていたが、令和2年(2020)からは、三河の赤引の糸(絹糸)を仕入れ、これを市内の織物業者に織ってもらうこととしたという。こうして用意された神御衣<sup>かんみそ</sup>は、おんぞ祭り当日の午前中、一旦、浜名惣社神明宮の撰社天棚機媛命社<sup>あめのたなばたひめのみこと</sup>に運ばれ、お祓いのあと、納められる。

午後2時になると、初生衣神社から、「太一御用」の旗を掲げた一団が行列をつくり、浜名惣社神明宮まで、天棚機媛命社<sup>あめのたなばたひめのみこと</sup>に納められた神御衣<sup>かんみそ</sup>を受け取りに行く。一団の先頭は神職で、「太一御用」の幟のほか、唐櫃・「皇大神宮神御衣<sup>かんみそ</sup>」「おんぞ奉獻」といった奉納幟を持った人々が付き従う。奉



図2-7-4 おんぞ祭りの行列



図2-7-5 おんぞ祭りの行列のルート(令和3年(2021))

<sup>1</sup> 昭和43年(1968)4月14日付 静岡新聞には、「82年ぶりに復活」の記事が掲載されている。

納してある「赤引の糸で織ったおんぞ」を唐櫃に納めると、初生衣神社へ同じ道に戻る。

それから初生衣神社の神事の始まりで、例祭を取り行い、唐櫃からおんぞを本殿に奉納する。例祭では、ゆったりとした優雅な巫女舞が舞われ、最後に餅投げで締める。その後、おんぞは、豊橋市の湊町神明社を経て、伊勢の内宮へ献納される。

おんぞ祭りは、機織りの神である天棚機媛命を祀る初生衣神社が遠州織物の聖地にもなっていることから、多くの繊維業関係者に注目され、近隣からも多くの人が集まるなか、厳粛かつ盛大に執り行われている。

## イ. 浜名惣社神明宮例祭(三ヶ日まつり)

### a. 例祭(三ヶ日まつり)の歴史

浜名惣社神明宮は、江戸時代までは「濱名庄」の惣社であり、三ヶ日町全体の鎮守さまであった。このため、6月1日は三ヶ日村の例祭日、9月1日は西郷(三ヶ日より北西部の12ヶ村)の例祭日、12月1日は東郷(三ヶ日より東南部の8ヶ村)の例祭日と定め、例祭を年3回行っていた。例祭日は、日ごろの氏神さまの御加護に対し、感謝の気持ちを込めて祭礼を行う日であり、氏子が真心をもって奉仕する日であった。明治6年(1873)からは、郷社と呼ばれるようになり、7月31日を宵祭、8月1日を本祭として定め、この日を例祭日(夏祭り)とした。夏祭りは、梅雨明けごろの疫病にかからないようにと祈ることが始まりと言われていた。その後、例祭日は、昭和8年(1933)から8月1日と2日に変わり(『静岡縣神社志』(昭和16年(1941))には、8月2日と記載)、昭和43年(1968)からは、8月の第1土曜日と日曜日となり、現在に至る。

現在の例祭は、浜名惣社神明宮に対し、三ヶ日六区といわれる三ヶ日の六つの地区(東町・西天(西天王町)・東天(東天王町)・上神(上神明町)・下神(下神明町)・西町)の氏子が中心となって行われるもので、宵祭り前夜の花火迎えから始まり、神事のほか、浦安の舞や手筒花火の奉納が行われ、太鼓台と屋台の引き回しも行われる。また、例祭の余興として、手踊りやみこし行列が行われ、町内を見渡すと、軒花がそこそこに飾られるなど、例祭日には三ヶ日六区を中心に地域全体がまつり一色に染まる。



図2-7-6 町内に飾られた軒花



図2-7-7 軒花

## b.例祭(三ヶ日まつり)の流れ

### ■花火迎え

はまな そうしゃしんめいぐう  
浜名惣社神明宮の例祭は、みっかび  
三ヶ日六区の氏子が中心となって盛り上げる。

例祭は、宵祭り前夜の「花火迎え」から始まる。

夕方、神明宮では御神火採火式が行われ、御神火から年番区の提灯へ火が分け与えられる。

その火は、みっかび  
三ヶ日六区の提灯や行灯みこしが待つ集合場所へ運ばれ、ここで、年番区の提灯から各区の提灯へ移される。提灯には、自治会長らの持つ手持ちの提灯のほか、各区名や「筒場」と書かれた高張提灯があり、次々と火が灯る。行灯みこしにも火が入り、各区の提灯・行灯みこし・花火箱などが順に神明宮に向かって移動する。子供たちが担ぐ花火箱は、今は花火は入っていないが、かつては、各区が選び抜いた奉納花火を入れ、神明宮境内へ運んでいた。

六区全てが神明宮に到着すると、拝殿において安全祈願祭が行われ、安全祈願の御祈禱を受けて、みっかび  
三ヶ日まつりが始まる。

### ■宵祭り

神明宮では、午前中に煙火祈願祭が行われ、続いて、氏神さまに、宮司から新氏子<sup>1</sup>の氏名が報告される「新氏子報告祭」が行われ、浦安の舞が奉納される。浦安の舞は、小学生によって、雅楽の調べにのってみやびやかに舞われる。

一方、みっかび  
三ヶ日六区の町内では、朝から、町内各所で青年・子供たちによる躍動感溢れる手踊りが披露される。西天では、手踊りのほか、獅子舞も披露されており、また、子供たちが町内の各戸をお祝いして回り、お供えのお餅と引き換えに「祝祭」金をいただいている。

宵祭りの日の昼過ぎには、午前中に各区の町内で披露していた手踊りのコンクールが行われ、子供たちが日ごろの練習の成果を披露する。手踊りは、明治から昭和の初めごろまでは、例祭の余興に祭り連が最も力を入れていたもので、練習を積み、衣装に凝って披露されていた。その



図2-7-8 行灯みこし(西天)



図2-7-9 花火箱



図2-7-10 手踊り

<sup>1</sup> 新生児や結婚、移住などであたらしく氏子となった人。

後、衣装や参加者の年齢層は時代とともに変化をしてきたが、昭和34年(1959)ごろより少女たちが手踊りに加わり、可愛い舞い姿が人気を呼び、大評判となったことで、昭和40年(1965)より手踊りコンクールが始まり、現在の手踊りは青年・子供たちによって引き継がれている。

夕方、神社境内で打上花火従事者のお祓いがあり、筒場の高張提灯に火が灯ると、前夜祭が始まる。四辻交差点には、全区の太鼓台と屋台が集合し、出発式が行われ、各区のお囃子が披露されたあと、太鼓台と屋台は列をなして各町内を巡行し、神明宮へ向かう。

太鼓台と屋台が神明宮に到着したのち、神明宮の境内では、花火が奉納される。これらの奉納花火は、煙火安全祈願祭で頂いた御神灯の火で打ち上げられる。最初に、羊羹ようかんと呼ばれる小筒の花火を手にした若連が列をなして約70本の花火の奉納をする。そのあと、奉納花火は手筒花火へと移る。約80本の手筒花火は、火柱が天高く上がり、噴射の迫力と若連の勇壮な姿が観衆を魅了する。手筒花火のあとは、各区により、境内に櫓が据えられ、大筒の花火と打上花火の奉納となり、宵祭りの夜の境内は大いに盛り上がる。

奉納花火が終了すると、太鼓台と屋台は神明宮を出発して四辻交差点へ向かい、ここで一旦解散となり、宵祭りは終了する。

### ■夜半の御饌(特殊神事)

宵祭りの終わった深夜(午前0時)、神明宮では、「夜半の御饌」といわれる特殊神事が行われる。神職が口おおいをして、熟饌じゅくせんといわれる調理した供物6品を8つの丸膳に盛り、御神前に供える。『静岡縣神社志』(昭和16年(1941))にも特殊神事として取り上げられており、また、宝永元年(1704)の『惣社神明宮中覚帳』に書かれている御祭礼の次第にもこの神事のことが示されている。これによると、年間の開催時期や、熟饌のうち生魚が干物になったことを除き、300年来、今日に至るまで、神事は同じ内容で受け継がれている。

神事は、境内と拝殿の灯りが全て消され、提灯の灯りのみで行われるとともに、祝詞をはじめ、全て



図2-7-11 太鼓台と屋台の巡行



図2-7-12 手筒奉納花火



図2-7-13 夜半の御饌



図2-7-14 熟饌

無言のまま行われる。参列者も口を閉ざし、静まり返った厳かな雰囲気の中で神事は進み、氏子たちの無病息災と繁栄をひたすら祈る。

宮司の祝詞(無言)が始まると、氏子総代2名が拝殿から出て、境内にある井戸へお神酒を供えに向かう。

祈りを終えると、直会<sup>なおらい</sup>があり、これをもって深夜の特殊神事はすべて終了する。参列者は、神事のあとで神職よりお供え物をいただき、持ち帰り家族に分け与え、一年間の健康を祈る。

深夜に神に御饌<sup>みけ</sup>を供えて、御加護に感謝し、平穩無事をひたすら祈る。これこそが祭りの原点であるといわれており、浜名惣社神明宮<sup>はまなそうしゃしんめいぐう</sup>では、夜半の御饌<sup>よわみけ</sup>として、古式による神事が受け継がれ、今も厳粛に行われている。

### ■本祭り

本祭りは、拝殿にて例祭の式典が行われ、浦安の舞が奉納されることから始まる。式典では、濱名庄の惣社としての格式から、古くから、庄屋・組頭など、村々の代表を招いて例祭を行ってきた伝統を受け継ぎ、現在も献幣使をお迎えし、多くの来賓をお迎えして、厳粛のうちにも盛大に宮司の祝詞奏上や氏子総代表による玉串奉奠<sup>ほうてん</sup>などが斎行される。

本祭りの日の昼間には、みこしコンクールが行われ、神明宮境内で披露されたのち、みこしが六区町内を一巡する。かつては樽みこしが多く担がれたというが、昭和60年(1985)ごろより各区にみこし連ができ、三ヶ日六区外からの参加もあって祭礼余興としてみこしの競演が人気を集めたことを受け、平成3年(1991)に創作みこしコンクールが始まった。現在では、話題を集めたテレビドラマやアニメの主人公を模すなど趣向を凝らしたみこしが出揃い、例祭の昼間の余興として人気を呼んでいる。

夕方になると、各区の太鼓台が四辻交差点に集合し、お囃子と太鼓を奏でながら神明宮をめざして巡行する。かつては屋台も出たが、近年では太鼓台のみとなっている。太鼓台は、神明宮に到着すると、拝殿前にお礼参りに集まり、神明宮では夜祭<sup>ゆうさい</sup>が行われる。夜祭ののち、太鼓台の解散式が行われ、流れ解散となって例祭すべての行事が終了する。



図2-7-15 例祭の式典の様子

表2-7-1 浜名惣社神明宮例祭スケジュール(令和元年(2019))

行事・時間		内容
花火迎え	17:30	御神火採火式
	19:30	行灯みこし
	20:00	安全祈願祭
宵祭り	8:30	手踊り(三ヶ日六区町内)
	9:00	煙火祈願祭
	10:00	新氏子報告祭(浦安の舞奉納)
	13:00 ~ 15:00	手踊りコンクール
	16:15	前夜祭
	17:30 ~ 20:50	太鼓台・屋台巡行
	19:15 ~ 20:20	奉納花火(手筒・大筒)
本祭り	0:00	夜半祭(夜半の御饌)
	10:00	例祭(浦安の舞奉納)
	11:00 ~ 14:20	みこしコンクール、みこし六区一巡
	16:20 ~ 17:30	太鼓台巡行
	17:00	夜祭

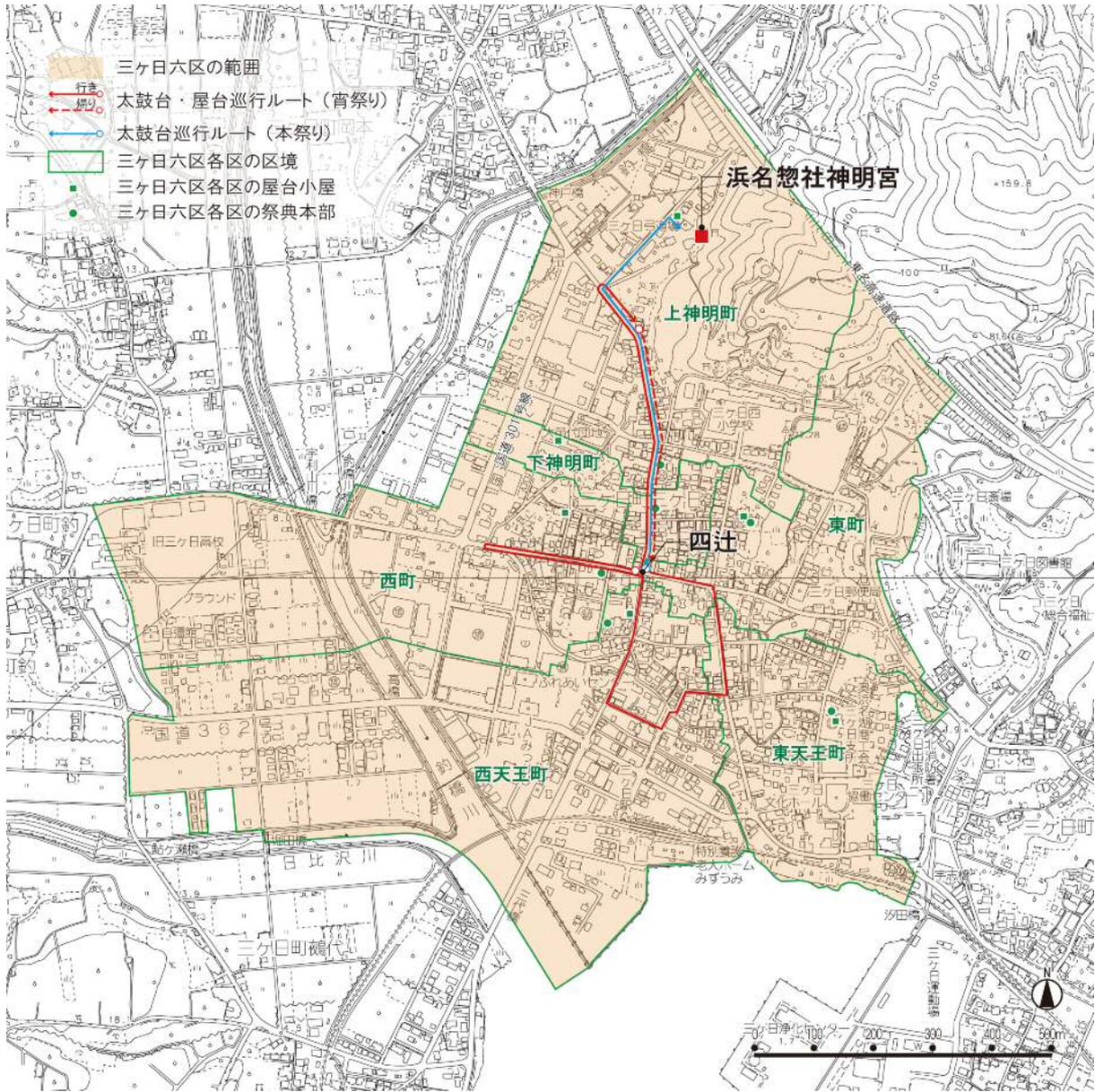


図2-7-16 浜名惣社神明宮例祭(三ヶ日まつり)での屋台・太鼓台の巡行ルート(令和元年(2019))  
 (令和元年(2019)の宵祭りは8月3日(土)、本祭りは8月4日(日))

#### ④まとめ

三ヶ日町三ヶ日地区には、浜名惣社神明宮や初生衣神社といった伊勢神宮と関係のある歴史の深い建造物が残り、そこでは、三ヶ日まつりという地域に根差した大規模な祭礼や、伊勢神宮との関わりが深いおんぞ祭りといった独自の祭礼が行われ、周辺環境と一体となって良好な歴史的風致を形成している。

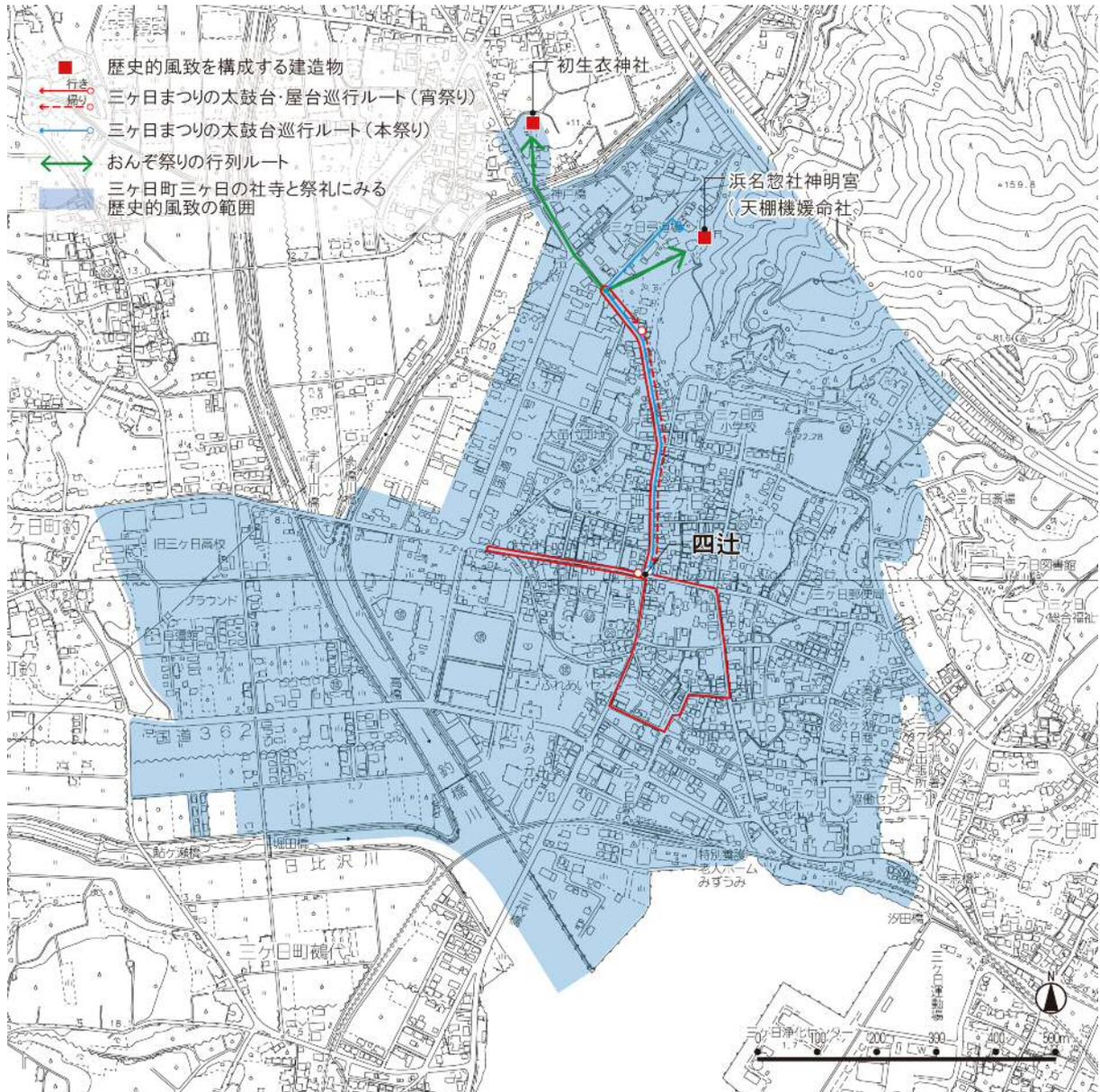


図2-7-17 三ヶ日町三ヶ日の社寺と祭礼にみる歴史的風致の範囲

### (3)大福寺にみる歴史的風致

#### ①大福寺について

大福寺は、姫街道沿いのかつての三ヶ日宿の北側に位置し、三ヶ日宿からはやや離れるが、多くの文化財を有する古刹である。大福寺の位置する一帯の谷は、伊勢神宮と関連の深い浜名惣社神明宮と初生衣神社が位置する平野部とともに、伊勢神宮の荘園であった地である。初生衣神社付近から北の方向へ伸びる大福寺への参道は、途中で分岐して東に折れ、静岡県指定名勝の庭園を有する摩訶耶寺へと続く。

大福寺への参道を進むと、左手に仁王門が建つ。さらに進むと、参道下を第二東名高速道路が横切り、ここを越えると、山の懷に本殿や客殿といった伽藍が配置された大福寺の現在の境内となる。大福寺は海拔40メートルの高さにあり、境内から南を眺めると、猪鼻湖を臨む景勝を楽しむことができる。

大福寺では、古くから残る建造物とともに、大福寺納豆の秘伝の製法が受け継がれている。

#### ②歴史的風致を構成する建造物

##### A.大福寺

大福寺は、高野山真言宗の寺院で摩訶耶寺と並ぶ古寺である。寺伝では、貞観17年(875)に富幕山の南斜面に開創した幡教寺を、承元元年(1207)に現在地に移したと伝わる。

参道を進むと、鎌倉時代の金剛力士立像を左右に配した仁王門がそびえ立ち、仁王門の前には、「寛政十一己未(1799)九月吉日」と彫られた灯籠が並ぶ。また、境内には、江戸時代に再建されたとされる本堂や客殿、六角堂など、多くの建物が残る。境内に残る建物のうち、庫裏は、国の登録有形文化財(建造物)で、大正期に、豊橋市にあった製紙工場の事務所兼迎賓館の建物であったものを、昭和20年代前半に大福寺へ庫裏として移築したもので、平成18年(2006)に改修工事を行っているものの、製糸業の事務所兼迎賓館の現存する典型事例としても貴重である。また、その西側には、寺伝によると室町時代

に作られ、江戸時代初期に茶人山田宗偏によって変改築庭されたといわれる池泉鑑賞兼廻遊式の庭園があり、大福寺庭園として静岡県の指定名勝となっている。庭園は、背後の山を利用した築山があり阿弥陀三尊が石組によって表され、西方浄土が想起される庭園である。



図2-7-18 仁王門と灯籠



図2-7-19 庫裏

また、大福寺<sup>だいふくじ</sup>では、遠州地域の特産でもある浜<sup>はま</sup>納豆<sup>なっとう</sup>（浜名納豆<sup>はまななっとう</sup>）の元祖と言われる大福寺納豆<sup>だいふくじ</sup>の秘伝の製法が受け継がれ、秋には、庭園の前に建つ客殿の縁側で、大福寺納豆<sup>だいふくじ</sup>を天日干しする光景が見られる。



図2-7-20 大福寺庭園

### ③大福寺<sup>だいふくじ</sup>にみられる活動

#### ア.大福寺納豆<sup>だいふくじ なっとう</sup>の製造と消費

大福寺納豆<sup>だいふくじ なっとう</sup>は、浜納豆<sup>はまななっとう</sup><sup>1</sup>の元祖と言われ、大福寺<sup>だいふくじ</sup>でのみ製造され、大福寺<sup>だいふくじ</sup>を主として、ほかに市内の数か所でのみ販売されている。

通常の糸引き納豆とはちがい、粘りがなく、ぽろぽろと乾いた味噌色の豆である。

徳川家康が好んで食したとされ、ある年の献上納期が遅れた際に「浜名の納豆はまだ来ぬか」と、納豆を待ちわびて言ったことから「浜名納豆」ともよばれるようになり、これが転じて「浜納豆」となったとも言われている。

紀州藩初代家老の三浦為春が浜名城主（現在の浜名区三ヶ<sup>みつ</sup>び日町）であった際に、二代将軍徳川秀忠に浜納豆を贈った際の「礼状」が発見されているほか、寛政11年（1799）に刊行された内山真龍<sup>うちやま まつ</sup>の『遠江國風土記傳』<sup>ととおみのくにふ じ き でん</sup>には、大福寺<sup>だいふくじ</sup>が「納豆を献じ、唐納豆<sup>たうなっとう</sup><sup>2</sup>と號す」との記載があり、大福寺<sup>だいふくじ</sup>から大福寺納豆<sup>だいふくじ</sup>の献上が行われていたことがわかる。

「大福寺納豆<sup>だいふくじ</sup>」の製法は門外不出とされ、代々受け継がれながら今でも寺一族の手作業で続けられているが、遠州地方では同種の納豆が「浜納豆」という名称で製造・販売され、大福寺納豆<sup>だいふくじ</sup>とともに浜松の名産品となっている。

大福寺<sup>だいふくじ</sup>では、7月ごろから大福寺納豆<sup>だいふくじ</sup>の仕込みに入る。大豆をゆでてから蒸籠で蒸し、裸麦を炒って細かくしたものをまぶし、専用の部屋で菌を付ける。その後、塩水に数か月漬けたあと、乾燥のため、天日干しをする。10月下旬から11月上旬に客殿の建物の縁側を利用し、縁側いっぱい広げて天日干しがされると、周囲には、大福寺納豆の香りがほのかに漂う。

大福寺納豆<sup>だいふくじ</sup>には、薬味として山椒のカラカワ（中皮）が入れてあり、ほかが真似出来ない珍味である。



図2-7-21 大福寺納豆  
（客殿の縁での天日乾燥）



図2-7-22 大福寺納豆

<sup>1</sup> 粘りのない、味噌のような色と味わい大豆の発酵食品。

<sup>2</sup> 徳川中期から浜名納豆と称するようになったが、豊臣時代までは唐納豆と言った。

戦国時代には、祝盃の下物に充てられたり、正月の諸大名参賀の祈り祝酒になくはならないものとして食され、現在においても、冷ややっこの薬味や料理の隠し味として広く使用されている。大福寺では、平成10年(1998)ごろまでは、正月に檀家へ配っていたといい、現在では、大福寺周辺のみならず、浜松の名産品として、遠方からも買い求めにやってくる。

#### ④まとめ

大福寺では、その歴史ある寺の境内で、大福寺納豆の秘伝の製法が受け継がれ、大切に守り伝えられている。季節になると、天日干しされる大福寺納豆の香りが周囲に漂い、歴史ある建造物の残る大福寺とその周辺の環境とが一体となって良好な歴史的風致を形成している。



図2-7-23 大福寺にみる歴史的風致の範囲

## (4)方広寺(奥山半僧坊)にみる歴史的風致

### ①方広寺(奥山半僧坊)周辺の地区について

浜名区引佐町奥山にある方広寺(奥山半僧坊)は、全国に多数の末寺を持つ臨済宗方広寺派の大本山である。寺域は、山に囲まれた谷一帯に広がり、門前には、門前町が形成されていて、方広寺への参詣者の賑わいの歴史が見て取れる。

この辺りは、中山間地域ののどかな集落が広がり、150 を超える末寺のなかでも、10 を超す数の末寺が、方広寺周辺に広がっている。方広寺で行われる年中行事は、行事が行われる場所自体は方広寺境内やその周辺に限られるが、広い範囲の集落やその住民が関わり、また行事によっては全国に及ぶ末寺が関わるなど、大本山ならではの、また、半僧坊信仰との融合ならではの特徴が見られる。



図2-7-24 方広寺伽藍



図2-7-25 方広寺門前

### ②歴史的風致を構成する建造物

#### ア.方広寺(奥山半僧坊)

応安4年(1371)、後醍醐天皇の皇子無文元選禅師によって開創された、東海屈指の名刹で、浜名区引佐町奥山に位置する。現在は、禅宗のうち、臨済宗方広寺派の大本山。開基は、この地を治めていた豪族奥山六郎次郎朝藤で、奥山家の所領の一部を寄進し、開山に至った。この奥山家は、井伊谷の井伊家の分家であり、引佐町奥山を領地として、奥山氏を称した。



図2-7-26 方広寺(本堂・鐘楼等)

方広寺境内には、方広寺の鎮守である奥山半僧坊大権現も祀られており、毎年10月17日の前の日曜日には半僧坊大祭が行われ、神輿を含む行列が境内の半僧坊から出発して渡御を行う。また、2月16日には火祭りが行われるなど、年間を通して様々な行事に多くの地区住民が参加し、多くの人で賑わう。

方広寺の伽藍は、七尊菩薩堂及び半僧坊真殿の一部以外は明治の大火で焼失したため、現在の伽藍は、大火のあと、大正年間(1912-1926)に建立されたものである。

方広寺七尊菩薩堂は重要文化財(建造物)で、棟札によると、応永8年(1401)に建立された。間口約90センチメートル、奥行き約150センチメートルの小さな堂であるが、柿葺の神社建築の一間社流れ造り様式で、県内最古の木造建築物として極めて貴重である。

半僧坊は開山堂西側にある伝説の僧・半僧坊をまつる権現造風の複合形式の堂宇で、木造平屋建て、入母屋造瓦型銅板葺、正面に千鳥破風と軒唐破風付1間向拝を付けた拝殿の背面中央に切妻造棧瓦葺の屋根がT字形に付く祈禱所を突出し、木造平屋建て、入母屋造棧瓦葺の真殿が接続する。棟札によると、拝殿は明治19年(1886)、真殿は明治21年(1888)に上棟した。拝殿正面は竜や獅子など装飾性豊かな彫物で飾られ、内部空間も変化に富んでおり、寺院というより神社の雰囲気醸し出している。



図2-7-27 方広寺七尊菩薩堂



図2-7-28 半僧坊拝殿

### ③方広寺(奥山半僧坊)にみられる活動

#### ア.方広寺(奥山半僧坊)の年間行事

方広寺と半僧坊は、年間を通して遠方からの参詣者も多い。明治の大火<sup>1</sup>後、焼失をまぬがれた半僧坊への信仰が盛んになると、街道は、方広寺参詣で往来する人々で賑わい、大正12年(1923)には、浜松から奥山に至る参詣のための軽便鉄道が開通した(奥山への路線は昭和38年(1963)廃止)<sup>2</sup>ほどである。

方広寺では、年間を通して様々な行事が行われる。1月1日の一番大鐘(除夜の鐘)にはじまり、2月には涅槃会や半僧坊の火祭り、7月から8月にかけては施餓鬼会、10月には半僧坊大祭など、方広寺の内外にわたり、方広寺と半僧坊に関わる多種多様な年間行事が行われる。なかでも、半僧坊大祭と半僧坊の火祭りは、引佐町奥山の多くの地区住民が参加する行

<sup>1</sup> 明治14年(1881)4月1日、方広寺は大火に見舞われ、半僧坊真殿は焼失をまぬがれたものの、本堂をはじめとする多くの建物を失った。

<sup>2</sup> 浜松軽便鉄道は、大正3年(1914)の元城～金指間の開通から始まり、大正4年(1915)には元城～板屋町間及び金指～気賀間が開通し、大正12年(1923)に気賀～奥山間が開通して、板屋町～奥山間が全通した。しかし、昭和38年(1963)には気賀口～奥山間が廃止となり、昭和39年(1964)に気賀口～遠鉄浜松間が廃止されて全線廃止となった。(この間、社名変更や合併、駅名変更などもあったが、詳細説明は割愛する。)

事であり、加えて多くの地区外からの参詣者もあり、特に賑わう行事である。また、4月に  
行われる開山忌は、開山様(無文元選禪師、開山大慈普應聖鑑圓明大師)を称えて行われてい  
る、650年近く続く本山特有の行事である。

### はんそうぼう a.半僧坊大祭

半僧坊とは、奥山半僧坊大権現のことで、方広寺の鎮守とされている。御神体は15年に一  
度開帳され、御開帳時には多くの参詣者が訪れる。また、毎年10月17日の前の日曜日には、  
半僧坊大祭が奥山地区の住民総がかりで行われ、  
神輿渡御・稚児行列などが行われる。

半僧坊大祭は、30年ほど前までは、10月16日及  
び17日の二日間行われ、地元若衆による手筒花火  
や打上花火も上げられ、周辺の学校も休校になるな  
ど、地域をあげて開催されていたという。その賑わ  
いは、方広寺の『庶務部日誌』の、明治39年(1906)10  
月17日の記載からもうかがい知ることができる。  
現在のように一日のみとなったのは、境内の円明閣  
(研修利用施設)を建設したころからである。

大祭当日は、半僧坊真殿にて大祭の大祈禱が行わ  
れ、大祈禱のあと、神楽殿では、優雅な音楽と優美  
な舞踊の神楽奉納が始まる。この神楽は、「馬門の  
神楽」と呼ばれ、神楽舞を奉納してきた馬門の集落  
(現馬門自治会)には、300年以上前から代々受け継  
がれていると言い伝えられており、昔は、方広寺の  
開山忌や半僧坊大祭の際に天竜の光明村が神楽を  
奉納してきたものを、馬門の集落が引き継いで今日に至っているという。この神楽は、参詣  
者が金銭を奉納することにより舞われる。また、舞のほか、半僧坊真殿にて祈禱されたお洗  
米が渡されるが、これには家内安全、無病息災等の御利益があるとされている。

半僧坊真殿では、大祈禱のあと、稚児祈禱が行われ、その後、半僧坊真殿の前から、神輿  
渡御と稚児行列が出発する。行列は、七尊菩薩堂など3か所で祈禱を行いながら進み、総門(黒  
門)を出て門前町の面影の残る通りを抜けて奥山グラウンドのお旅所に到着すると、そこで神  
事が行われ、その後、再び、半僧坊真殿に向けて渡御が出発する。帰路は、稚児行列が付き  
従わない代わりに、子供神輿が加わる。

渡御が半僧坊真殿前に帰着すると、行列は解散し、食堂で祝膳がふるまわれる。また、神  
楽舞の奉納は、渡御の最中も続けられる。その後、中学校の吹奏楽部の演奏などのイベント  
をはさみ、最後に本堂前で投げ餅が行われて大祭が終了する。



図2-7-29 半僧坊大祭(神輿渡御等)



図2-7-30 馬門の神楽



火伏せの行事である「火祭り」が開催されるようになったとのことで、大正 10 年(1921)の方広寺の『ほうこうじ再建日誌』には、2月16日に「火鎮祭」の名称で記載されている。また、昭和 43 年(1968) 2月 17 日の静岡新聞の夕刊には、前日に行われた火祭りの記事が掲載されており、遠くは東京などの遠方からも参拝者が来ていたことをうかがい知ることができる。

また、火祭りの際には、半僧坊の祈禱札が多く出回る。火祭りの際に祈禱したお札は、方広寺の末寺や、門前にも配られるほか、半僧坊様の火伏せの御利益を求め、多くの人買い求めていく。持ち帰ったお札は、台所や玄関、神棚などへ貼られる。



図2-7-34 半僧坊のお札(姿札)



図2-7-35 半僧坊のお札(半僧坊札)

### c.開山忌むもんげんせんぜんじ(無文元選禪師の法要)

開山忌は、4月21日・22日に行われる開山様むもんげんせんぜんじ(無文元選禪師、開山大慈普應聖鑑圓明大師)を称えて行われる法要で、4月21日の宿忌<sup>1</sup>・4月22日の半齋<sup>2</sup>では、管長<sup>3</sup>による九拝<sup>4</sup>や十八拝<sup>5</sup>のあと、楞嚴呪行道として参加者が皆で歩きながらお経を唱えるなど、特徴ある行事が650年近くも続いている。

4月21日は「総茶礼そうさらい」と言われる、一堂に集まって煎茶をいただくところから始まり、開山様に捧げる「御詠歌奉詠ごえいかほうえい」、「宿忌しゆくき」などが行われる。4月22日には、半僧坊真殿で祈禱があげられ、本堂の開山大師へけんしやく献粥<sup>6</sup>を行い、「半齋」などが行われたのち、「塔参」として、御廟<sup>7</sup>に向かいお経をよみ、墓参りを行う。



図2-7-36 半齋(十八拝)



図2-7-37 半齋(楞嚴呪行道)

<sup>1</sup> 僧侶(ここでは開山様)の忌日の前日に行う法要。

<sup>2</sup> 僧侶(ここでは開山様)の忌日に行う法要。いわゆる法事。

<sup>3</sup> 仏教・神道で、一宗一派を管理・支配する代表者。

<sup>4</sup> お供えものをして3回拝む(三拝)を3回繰り返す動作。宿忌で行われる。

<sup>5</sup> お供えものをして3回拝む(三拝)を6回繰り返す動作。半齋で行われる。

<sup>6</sup> お粥をお供えすること。

<sup>7</sup> 無文元選禪師は後醍醐天皇の皇子であるため、境内に宮内庁が管理する御廟がある。一般公開はしていない。

167 にも及ぶ<sup>ほうこうじ</sup>方広寺の末寺と、それらの末寺の檀家総代ら 400 人近くが全国から集まり、盛大に行われる法要であり、明治 40 年(1907)の方広寺の<sup>ほうこうじ</sup>『庶務部日誌』からも、4 月 21 日・22 日の両日にわたり開山忌が行われていたことが確認できる。

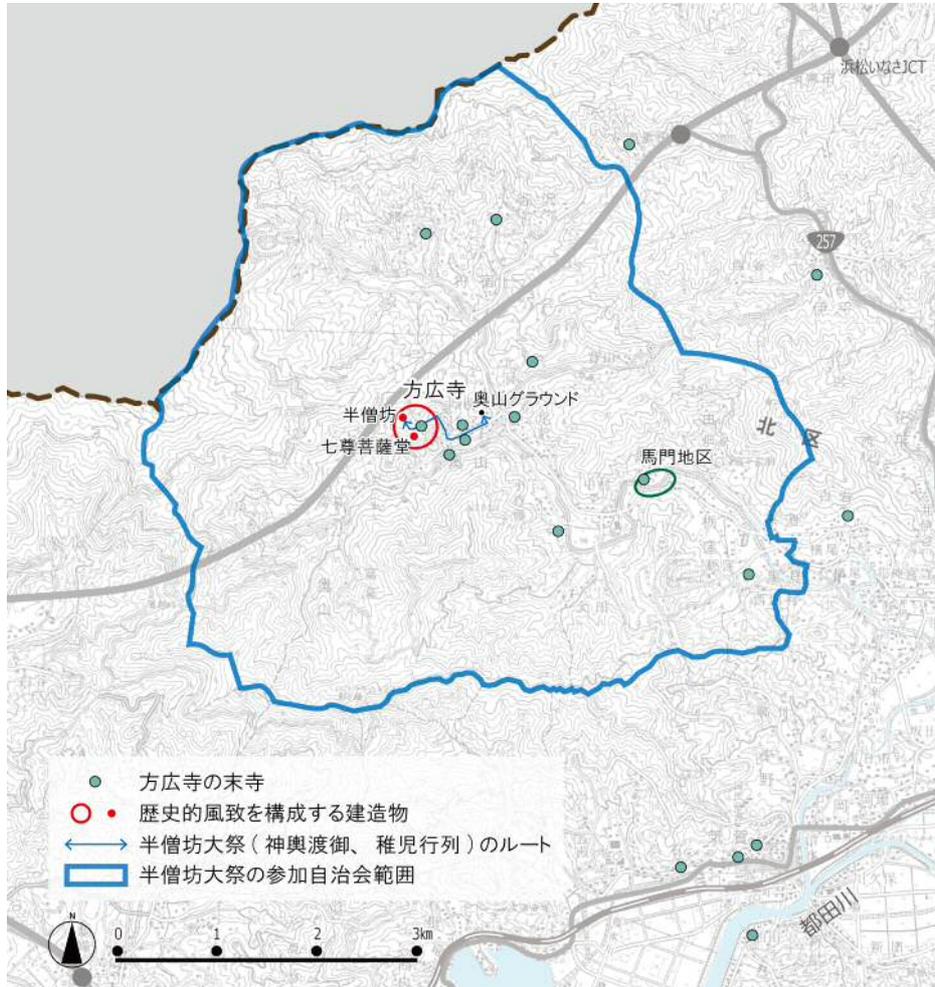


図2-7-38 半僧坊大祭の参加範囲と周辺の方広寺末寺位置

④まとめ

方広寺<sup>ほうこうじ</sup>周辺では、中山間地域の<sup>ほんそうぼう</sup>のどかな集落が点在する中に、広く信仰を集める方広寺<sup>ほうこうじ</sup>(奥山半僧坊)が山に囲まれた谷一帯に伽藍を構え、<sup>ほんそうぼう</sup>門前町を形成しており、そうした景観のなかを神輿が渡御する<sup>ほんそうぼう</sup>半僧坊大祭のほか、大本山ならではの行事も行われ、周辺環境と一体となって良好な歴史的風致を形成している。

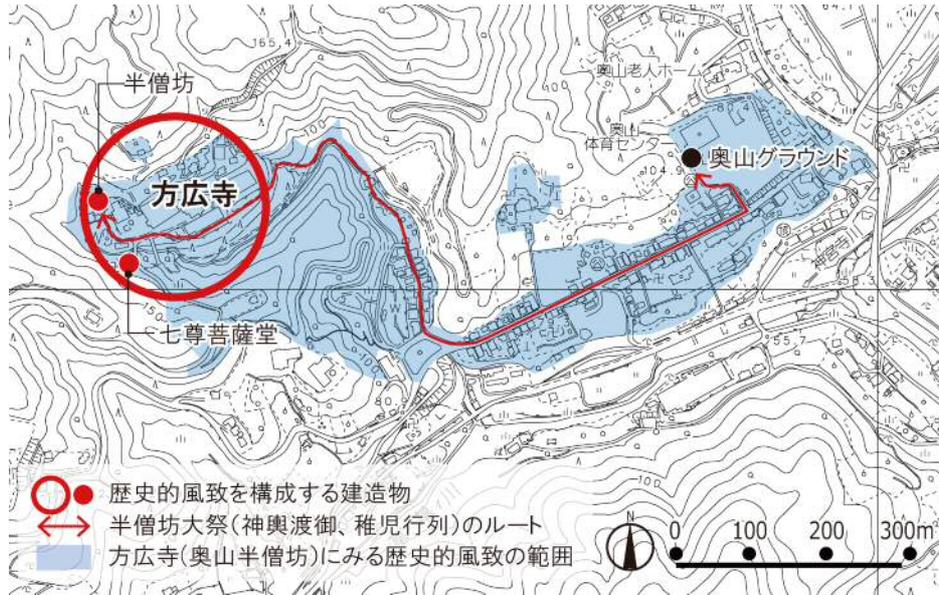


図2-7-39 方広寺(奥山半僧坊)にみる歴史的風致の範囲

## (5) 引佐町井伊谷周辺の社寺と祭礼にみる歴史的風致

### ① 引佐町井伊谷地区とその周辺について

奥浜名湖の北に位置する井伊谷は、東西1キロメートル・南北1.5キロメートルほどの小盆地で、その周辺は平安時代から戦国時代までのおよそ600年にわたり、国衆の井伊氏によって治められてきた井伊家ゆかりの地である。かつて、盆地北側には城山の山頂に井伊谷城とその山麓に井伊氏の居館がおかれ、盆地中央付近には、井伊氏の菩提寺である龍潭寺が位置した。龍潭寺は現存し、現在も井伊家の供養を続けている。

その他にも、当地には、井伊家ゆかりのものが多くみられる。盆地の北東方向には、井伊氏が本城とした三岳城跡のある三岳山が位置し、龍潭寺の建物の瓦には、井伊家の橋の家紋や井の字(井桁)の旗印などを刻んだものが見られるが、この地域の一般の家々にも、橋の紋を入れた瓦を使用している建物が散見される。また、まちづくりのなかでも、井桁を橋の欄干のデザインに取り入れるなどされており、この地域の井伊家や龍潭寺との関わりの深さを感じることができる。



図2-7-40 瓦に橋紋のある民家



図2-7-41 瓦の橋紋

### ② 歴史的風致を構成する建造物

#### A. 龍潭寺

浜名区引佐町井伊谷に位置する萬松山龍潭寺は、臨済宗妙心寺派の寺院で、天平5年(733)、行基菩薩が開創したと伝わる古刹である。禅宗となったのは室町時代末期、井伊家20代直平が帰依した黙宗瑞淵和尚を開山として迎えてからで、その後江戸時代を通じて、井伊家の菩提寺として栄えてきた。現在の伽藍は江戸時代に構成された。龍潭寺伽藍は、それぞれ棟札によると、明暦2年(1656)の山門(1



図2-7-42 龍潭寺本堂

間1戸4脚門、本瓦葺)、延宝4年(1676)の本堂(桁行9間、梁間6間、入母屋造、方丈形式で、周囲に1間半の縁が巡る。)、元禄15年(1702)の開山堂(桁行3間、梁間3間、二重、宝

形造、本瓦葺で二重塔の形態を持つ。)、寛保2年(1742)の井伊家霊屋(桁行3間、梁間3間、宝形造、棧瓦葺)、寛政8年(1796)の稲荷堂(1間社流造、板葺、向拝軒唐破風付きの堂舎)、文化12年(1815)の庫裡(間口約10間、奥行き16間、切妻造妻入り、棧瓦葺)の6棟が現存する。近世寺院建築が伽藍を構成して現存することは県内でも貴重である。

また、池泉式庭園の龍潭寺庭園は、小堀遠州の作と言われており、昭和11年(1936)に名勝に指定されている。

また、龍潭寺の北方には、井伊家が居城とした井伊谷城跡や、さらにその北東には、南北朝時代、井伊氏の本城として宗良親王を擁して南朝方の拠点とした三岳城跡が位置する。

龍潭寺は、井伊家の菩提寺であることから、年間を通して様々な井伊家の供養に関わる行事が行われている。境内には井伊家の元祖井伊共保から24代井伊直政までの井伊家歴代の墓所や井伊家霊屋があるほか、龍潭寺から南へ200メートルほど離れた場所には、井伊家の元祖共保の出生の井戸として伝承されている井戸があり、こうした場所で供養が続けられている。

#### イ.井伊共保出生の井戸

龍潭寺から南へ200メートルほど離れた場所には、寛弘7年(1010)、井伊家の元祖共保出生の井戸として伝承されている市指定の史跡「伝井伊共保出生井」がある。井戸と共に建つ笠塔婆型石碑の銘文によると、石碑と井戸の整備は、貞享5年(1688)に井伊直該<sup>1</sup>によってなされたものである。また、享和3年(1803)に成立した『遠江古蹟図絵』にも「井伊谷の井」として、井戸の存在と共保出生の逸話が取り上げられている。

この井戸では、日々の供養や管理が続けられているほか、龍潭寺と共にここを訪れる参拝客も多い。また、井伊家歴代の藩主の参拝の記録が残り、現在でも一般の方以外に井伊家ゆかりの方々も訪れている。



図2-7-43 龍潭寺庭園



図2-7-44 井伊共保出生の井戸

<sup>1</sup> 彦根藩4代藩主、のちの直興。

## ウ.三岳城跡

三岳城は、井伊谷盆地を見下ろす標高460メートルを超える三岳山の山頂に築かれた大規模な山城で、井伊領内の諸勢力が集結する本城であった。

南北朝時代には井伊氏が宗良親王を迎え、南朝方の拠点となるが、暦応2年(1339)に北朝方の攻撃により落城した。また、戦国時代には井伊氏が三岳城に立て籠もり今川方に抵抗したが、永正10年(1513)に落城した。

三岳城はその後、今川氏や徳川氏によって改修されたが、天正年間(1573-1592)には使われなくなった。

現在は、戦国時代に改修された本曲輪、二の曲輪、帯曲輪などが残り、昭和19年(1944)には、国の史跡に指定されている。



図2-7-45 三岳城本曲輪



図2-7-46 三岳城跡から見る奥浜名湖の景観

## ③引佐町井伊谷にみられる活動

### ア.井伊家供養

井伊家の菩提寺である龍潭寺では、年間を通じて井伊家歴代の供養を行っている。

本堂及び境内にある井伊家霊屋では、毎日のようにお経があげられる。また、井伊家の元祖共保出生の井戸では、龍潭寺の寺域<sup>1</sup>や三岳城跡のある三岳山を借景に、貞享5年(1688)に井戸が整備されて以来、日々の供養や管理が行われており、参拝客も龍

潭寺と共にここを訪れる。また、龍潭寺にある井伊家歴代の墓地にも、しばしば参拝客が訪れる。特に、井伊直虎<sup>2</sup>の命日である8月26日には、一般の参拝客も参加して命日法要が行われ、本堂での読経とお焼香の後、墓地においても読経とお焼香が行われ、多くの参拝客の姿が見られる。



図2-7-47 井伊共保出生の井戸と三岳山(三岳城跡)

<sup>1</sup> 寺院の敷地。

<sup>2</sup> 戦国時代、井伊家の当主を務め、優れた政治手腕によって井伊家を断絶の危機から救った人物。また、24代直政の養母となった、次郎法師とされる。平成29年(2017)の大河ドラマ「おんな城主 直虎」の主人公。



図2-7-48 井伊直虎命日法要(本堂内)



図2-7-49 井伊直虎命日法要(井伊家墓所)

また、井伊家供養に関しては、24代井伊直政<sup>1</sup>が彦根藩主となり、以来、井伊家が彦根藩主を務めたことから、彦根藩主の参詣等の記録も残っている。彦根藩主として龍潭寺への参詣の記録が残る最も古い例は、彦根藩4代藩主井伊直該であり、享保期(1716-1736)に記された『井伊家傳記』などには、正徳元年(1711)秋、手元金130両を龍潭寺に下付したとされている。また、正徳4年(1714)には、井伊共保出生の井戸及び龍潭寺を参詣したとの記録もある。さらに、嘉永4年(1851)の『井伊掃部頭様御参詣記録』などの龍潭寺文書によると、江戸時代後期においても、彦根藩13代藩主井伊直弼が井伊共保出生の井戸や龍潭寺を参詣した記録が残る。

その後も、彦根の井伊家と龍潭寺との関係は続いており、井伊家の方々がしばしばこの地を訪れている。

<sup>1</sup> 徳川家康を支え続け“徳川四天王”の一人とされた人物。“井伊の赤鬼”とも呼ばれるほど戦場で目覚ましい活躍を見せた。井伊家再興を果たし、譜代大名筆頭として大老を輩出するなど江戸幕府で重きをなした彦根井伊氏の基礎を築いた彦根藩祖。

#### ④まとめ

井伊谷周辺では、かつてこの地を治めた井伊氏との関係が龍潭寺や井伊共保出生の井戸などに色濃く残っており、井伊氏とこの地域との関係の深さは、井伊谷城や三岳城が位置するだけでなく、周辺の家々に井伊家と同じ橘の家紋があしらわれた瓦が使用されていたり、まちなかに井伊家の旗印であった井桁のデザインが取り入れられていたりすることからもわかる。そうした市街地環境のなかで行われる井伊家供養のための活動は、活動が行われる建造物を含めた井伊家との関わりを感じられる市街地環境など周辺環境と一体となって良好な歴史的風致を形成している。

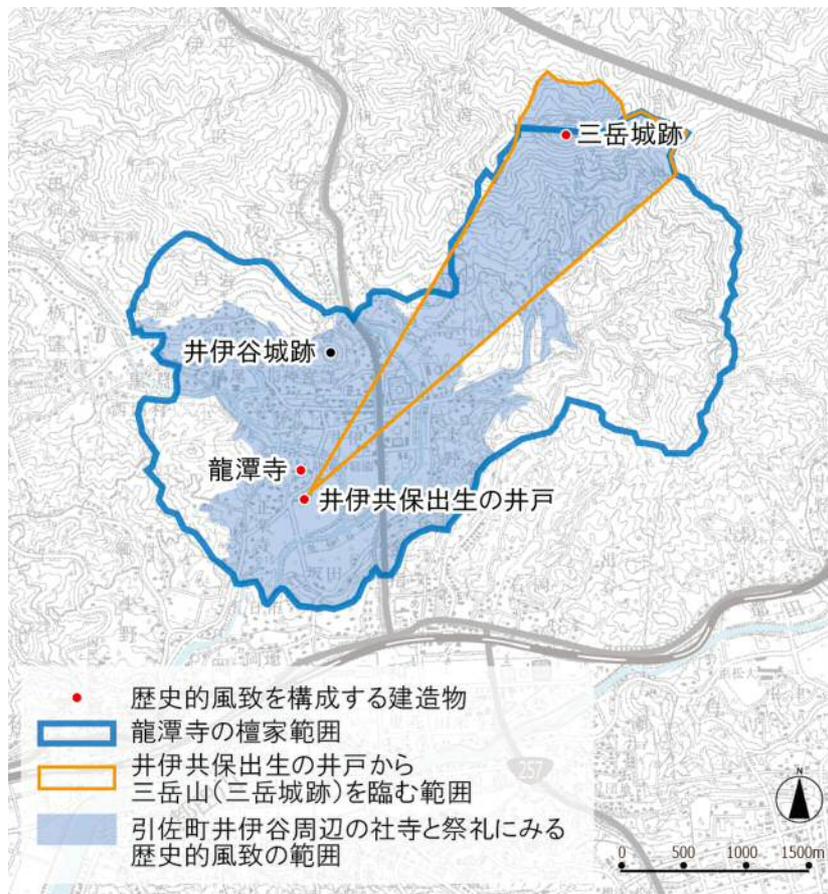


図2-7-50 引佐町井伊谷周辺の社寺と祭礼にみる歴史的風致の範囲

## (6) 引佐町金指の社寺と祭礼にみる歴史的風致

### ① 引佐町金指地区について

金指は浜松と北三河・信州を結ぶ街道(ここでは、旧金指街道と称する。)<sup>1</sup>沿いに発展した商家町を中心とした集落であり、坂のまちである。都田川の小平野(浜名区引佐町中川)から井伊谷へ向かう途中、金指原と呼ぶ丘陵を越える。旧金指街道は、この丘陵を上る細長い尾根にあり、尾根の斜面づたいに金指の集落が形成された。金指の集落では、坂の両側に商店や旅館が並んでいて、江戸時代からマチを構成し、小さくはあるが浜名湖北部の最も栄えたまちであった。

また、鳳来寺や信州へ通ずる街道の入り口にあたる交通の要所でもあったため、江戸時代には、気賀方面への街道(旧気賀街道)との分岐に、関所(番所<sup>2</sup>)が設けられた。

さらに、平野部と山間部との物資の交換の場でもあったため、商業活動が盛んであった。安間家の享保18年(1733)の『先祖覚書』によれば、慶長2年(1597)、近藤季用<sup>3</sup>が安間清右衛門に金指に市を立てるように命じたといひ、金指の市は3の日と8の日の月6回市が立ち、六斎市として繁盛したという。

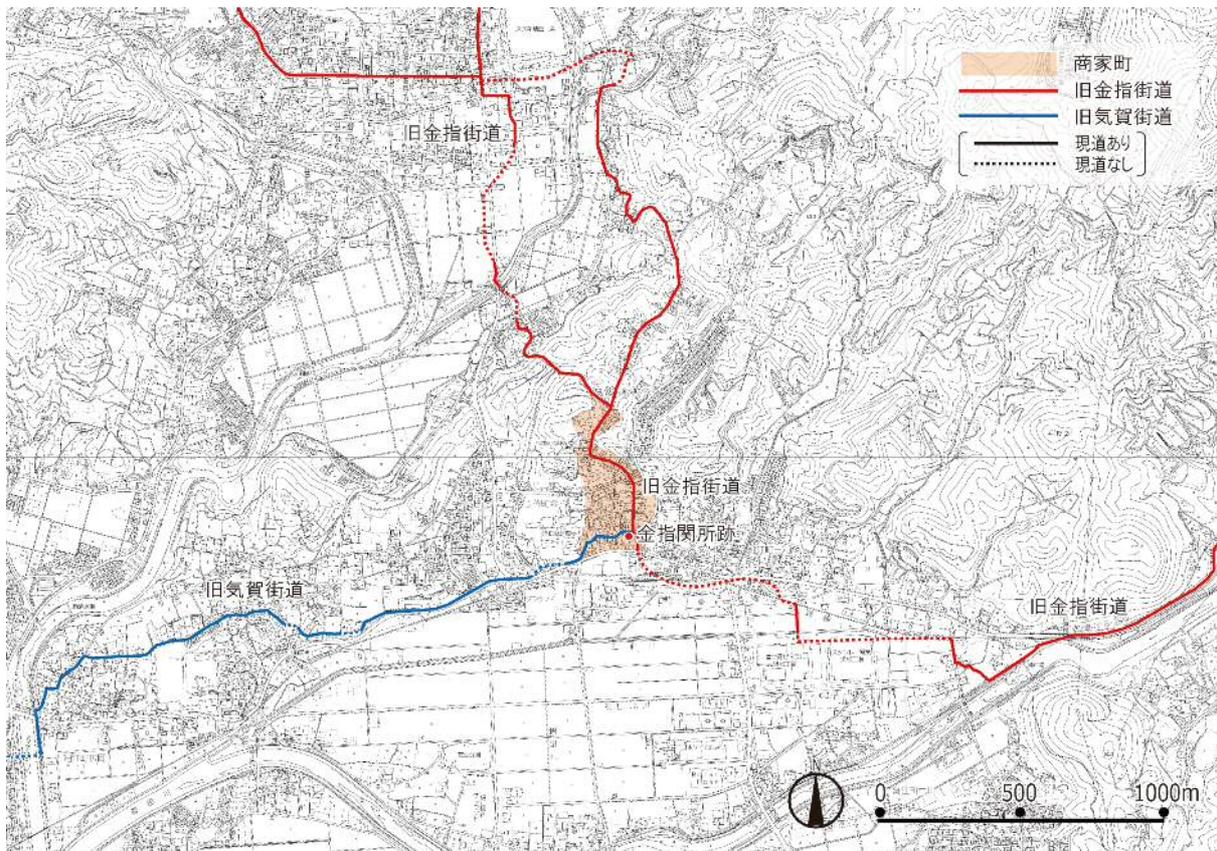


図2-7-51 街道位置図(旧金指街道と旧気賀街道)

<sup>1</sup> この街道は、信州からは金指街道と言われた。浜松宿からは、三方原台地を北上し、都田川の小平野を横断して、井伊谷、渋川を経由して鳳来寺方面へ向かう街道で、金指の旧集落を通過することから、金指街道とも、あるいは半僧坊道とも呼ばれ、ほかにも、鳳来寺道・信州街道・三信街道など様々な名称で呼ばれていた。

<sup>2</sup> 1830年までは番所として機能したが、それ以降は関所に格上げされた。

<sup>3</sup> 旗本「金指近藤家」の初代。江戸時代、金指の集落一帯は金指近藤家が領主として治めた。

この付近は、近代化に伴って整備された国道 257 号がこの地を大きく迂回して建設されたため、江戸時代の街道の景観が残されている。浜松市内の旧街道における宿場・町屋等は平野や小盆地に築かれており、高低差のある傾斜地に町屋が展開している例はめずらしい。近年、商家として営業を続けている店はほとんどなくなりましたが、金指地区には坂のまち・市の立ったまちとしての特徴が残されている。



図2-7-52 中町から上町方面(北西)を臨む

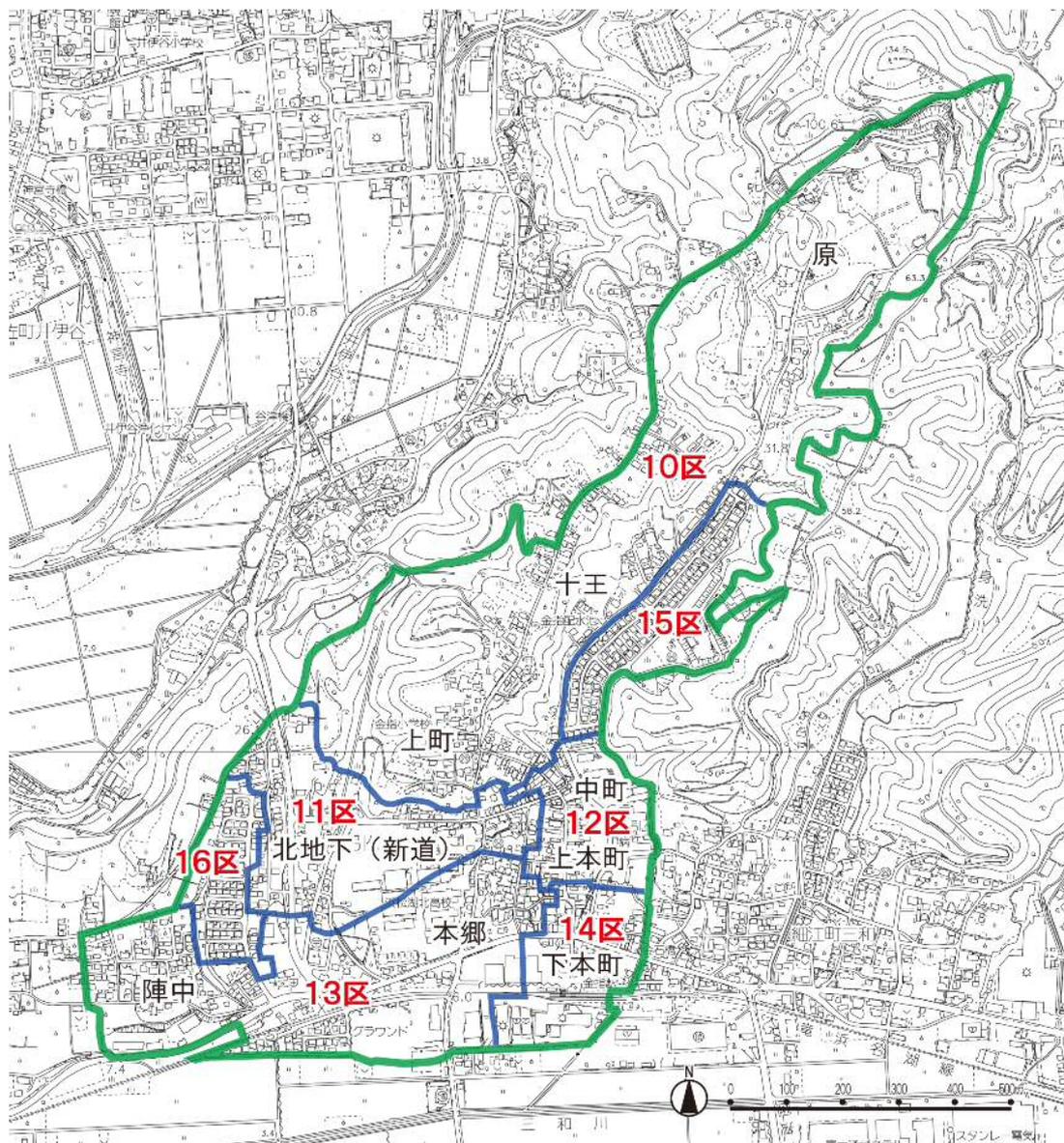


図2-7-53 金指の区割り

## ②歴史的風致を構成する建造物

### ア.旧金指街道沿いの商家町

慶長2年(1597)、近藤季用すえもちにより金指かなさしに市場が開設され、金指かなさしは、街道沿いの商家町として発展していくことになり、明治に至るまで、この境界の商業の中心地として栄えていくことになる。金指の町屋敷づくりは、井伊谷の『中井家日記』によると、正保元年(1644)に着手されたさだもちとされ、近藤貞用により、国家老の指揮で計画的に展開されていった。明治3年(1870)、金指大火により、町の半分(坂の上半分)が焼失したが、街道沿いには、鈴木家や中沼家(旧日野屋酒店)など、使われなくなってしまったものも含め、江戸時代の町屋の特色をよく残した商家の建物や商家町としての繁栄を物語る建物が比較的残っている。



図2-7-54 中沼家(旧日野屋酒店)

#### a.鈴木家

旧金指街道の上り坂を上りきる手前、実相寺に向けて急なカーブを曲がったところに、鈴木家が金指の商家の面影を残して建っている。鈴木家は、かつて醤油醸造業等を営んだ商家であった。

『静岡県の民家－静岡県文化財調査報告書第12集－』(静岡県教育委員会、昭和48年(1973)発行)によると、内部の間取りは、片側を通り土間とし、床上は六間取りの形式で、明治初期に建造された2階形式の町家であり、みせの正面にしとみど蔀戸を釣り、明治になっても江戸時代の町家の特色であった構えを一部に採用した例と言えるという。

木造2階建て切妻造平入りの建物は、屋根を瓦葺こけら(一部柿葺)からガルバリウム鋼板葺にするなど一部改修されているが、街道沿い正面のしとみど蔀戸や開口部(窓や扉などにあたる部分)の縦格子の意匠を残すなど、商家の特色とかつての意匠や風合いを残し、景観に配慮された改修がなされている。



図2-7-55 鈴木家



図2-7-56 鈴木家(昭和初期)

金指の夏祭りの際には、鈴木家の前を、野原神社の神輿みこしや地区の屋台がとおり、往時から続く祭りの雰囲気を楽しむことができる。

## イ.市神様と秋葉様

都田村年代鑑坂本柳次氏蔵『金指安間保家文書』によれば、慶長2年(1597)、近藤季用が金指に市場を開設した。市は、六斎市と呼ばれるもので、毎月3と8の日、月に6回立てられた。

市で栄えた<sup>かなさし</sup>金指の町には、町の繁栄を祈り、市場の神様である市神様と、火事がないことを願って秋葉様<sup>あき</sup>が祀られている。市神様は、早いところは江戸時代中ごろに、秋葉常夜灯と合祀されたと言われており、現在は通称で「秋葉さん」と呼ぶ住民も多いという。こうした市神様と秋葉信仰との結びつきは、町の繁栄は火事がないことと表裏一体の関係があったからで、市神様と秋葉灯籠は近い関係にあったと考えられている。

金指のマチの中心部は、氏神である野原神社のあるあたりから、旧金指街道の坂を下方に向かい、原・十王・上町(現在の金指10区)、中町・上本町(同12区、栄町ともいう)、下本町(同14区)と並んでおり、市神様と秋葉様は各区で祭られ、現在は、10区は十王、12区は中町、14区は下本町の3か所に小さな祠と灯籠が位置している。12区、14区のそれは、祠・灯籠など設置されているものは作り直されて新しいが、10区の秋葉灯籠は、「元文四己未(1739)」年と刻まれたものが残る。また、14区の祠には明治32年(1899)の棟札が残されている。

現在でも1月の第2週または第3週の日曜日には、それぞれの区で例大祭が行われるなど、市神様と秋葉様への信仰が続いているとともに、金指の夏祭りの際には、旧金指街道沿いにあるそれぞれの市神様・秋葉様の前を、野原神社の神輿<sup>みこし</sup>や、地区の屋台が通る。



図2-7-57 10区市神様・秋葉様



図2-7-58 12区市神様・秋葉様



図2-7-59 14区市神様・秋葉様

## ウ.実相寺

松源山<sup>じっそうじ</sup>実相寺は、臨濟宗<sup>ほうこうじ</sup>方広寺派の古刹で、嘉慶元年(1387)、方広寺開山の無文元選<sup>むもんげんせん</sup>禪師の高弟で、奥山方広寺四下院<sup>えつおう</sup>第一東隱院の開山の悦翁<sup>すえもち</sup>和尚が開基として実相寺と改称し、近藤家の庇護を受けてきた。

境内には、延宝6年(1678)再建の禅宗方丈形式の本堂、柱の墨書によると元禄15年(1702)建立の観音堂、扇垂木が特徴的な弘化2年(1845)再建の庚申堂、享保2年(1717)建立と伝わる鐘楼門<sup>かねむら</sup>のほかに、金毘羅堂や葉医門などが残り、市内に残る寺院のうちでも伽藍<sup>がらん</sup>の形をとる近世社寺建築の貴重な事例である。

また、実相寺庭園は本堂東側・観音堂北側にあり、静岡県指定の名勝である。築山式枯山水庭園となっており、意匠の手法から江戸時代前期の作庭と考えられている。築山群の背後に開基である近藤<sup>こんどうすえもち</sup>季用夫妻の廟所が配され、この御廟を遥拝するために築造されたと考えられている。また、更に背後には、国の史跡である三岳城跡<sup>みたけじょう</sup>のある三岳山<sup>みたけやま</sup>が遠望され、三岳山が借景として取り入れられており、庭園・廟所・三岳山という一連の景観が展開する独自の庭園構成となっている。

実相寺では、年間をとおして様々な年中行事が行われるとともに、金指の夏祭りの際には、実相寺の前を夏祭りの屋台や神社の神輿<sup>みこし</sup>がとおる。



図2-7-60 実相寺本堂(左)と観音堂(右)



図2-7-61 実相寺庭園(奥に三岳山を臨む)

## エ.野原神社

野原神社は、かつて、「東の宮」と呼ばれ、旧引佐<sup>いなさ</sup>高等学校(現在の県立浜松湖北高等学校)の正門のすぐ東側に位置していたが、明治7年(1874)の一村一社制により、「西の宮」と呼ばれて旧引佐高等学校北西側に位置していた六所神社と合祀され、野原神社として現在の地に移設された。

野原神社の拝殿は、桁行3間、梁間3間、入母屋造瓦葺、正面に千鳥破風付1間向拝を付けた木造平屋建ての建物で、明治44年(1911)に増改築され、これを示す奉納額や落成記念の写真が残る。



図2-7-62 野原神社拝殿

<sup>1</sup> 東隱院・臥雲院・三生院・藏龍院

<sup>2</sup> 明治期に、享保期のものを建て替えたともみられ、また、昭和32年(1957)に大規模な修理が施され、その際、部材のほとんどが替えられてしまったと考えられる。

拝殿の奥には幣殿・本殿が接続され、本殿は昭和 41 年(1966)改築の記録が残る。境内には、他に水舎や「明治四十四年(1911)八月建之」の銘のある鳥居、紀元 2600 年<sup>1</sup>を記念した「昭和十五年(1940)一月」と銘のある狛犬などが残る。

8月の野原神社の例大祭では、神輿の渡御を行い、各区の屋台も出て、金指のまちが祭一色に染まる。

### ③引佐町金指にみられる活動

#### ア. 実相寺の年中行事

##### だいほんにやえ a. 大般若会

実相寺の大般若会は、かつては1月10日に行われていたが、現在では1月3日に行われている。

この日は、本堂に13~14名ほどの和尚と檀家や地域の住民70~80名ほどが集まり、大般若経を転読<sup>てんどく</sup>する。

この日、本堂では十六善神<sup>ぜんしん</sup><sup>3</sup>の画像を掛け、お神酒、お洗米などと般若札<sup>4</sup>や厄難消除などの諸護符をお供えし、中央の住持席の両側に経机を並べ、大般若経六百巻を配し、皆でおつとめをする。現在、大般若会に使用されている道具は、そこに記載された年代などから、既に230年以上を経ているものも使われており、この行事の歴史の長さがうかがえる。

鐘楼門の鐘が突かれ、堂内の太鼓で大般若会の開始が告げられると、和尚が続々と入ってきて、経本が山積みされた経机につく。大般若会では、和尚は、心経三巻に続き、一斉にパラパラと経本を翻し、太鼓の早いリズムに合わせて大きな声で競うかのように転読する。



図2-7-63 大般若会の様子(転読)

<sup>1</sup> 日本書紀に記された初代天皇である神武天皇の即位の年を元年とする日本独自の紀元表記で、元年は西暦でいうところの紀元前660年とされる。

<sup>2</sup> 両側の和尚が机上の経本をおしいただき声高らかに「大般若波羅蜜多経巻第〇〇大唐三蔵法師玄奘奉詔訳」と唱え、左右に各三転、パラパラと経本を翻し、最後に「幸福一切大魔最勝成就」と力を込めて唱え、以下数十巻を反復して行う。

<sup>3</sup> お釈迦様を中心に16体の護法夜叉善神<sup>ごぼうやしゃぜんじん</sup>がとりまく図で、般若経を受持し読誦する者を守護する御神像。

<sup>4</sup> 大般若会で御祈禱したお札。戸口や鴨居に貼ったり、仏壇やお札箱と一緒に納めておく。

### b.花まつり(降誕会／灌仏会)

花まつりは、お釈迦様の生誕を祝って行われるもので、実相寺では生誕日である4月8日近くの日曜日に行われており、子供が多く参加する。



図2-7-64 花まつりの様子



図2-7-65 花まつりの様子(誕生仏に甘茶をかけている様子)

お釈迦様生誕の逸話<sup>1</sup>に因んだ張子の白い象を本堂に飾るが、昔は、この象を子供たちがリヤカーで引き、金指の町内をまわったという。実相寺の花まつりに子供が多く参加するようになったのは、昭和20年代ごろからで、このころの写真が残っている。

また、本堂には花御堂<sup>はなみどう</sup>が設置され、そこに甘茶の入った器<sup>あまちや</sup>が置かれ、子供たちや参加者が杓子で中心部の誕生仏<sup>2</sup>に甘茶をかける<sup>3</sup>。当日は、和讃などのほか甘茶のおもてなしやゲームなども行われ、多くの子供が花まつりに集まってくる。

### c.山門施餓鬼会

お盆の行事である施餓鬼は、実相寺では山門施餓鬼といい、8月14日に行われている。

檀家の人々が集まり、新盆の仏様や檀信徒の御先祖様、ならびにすべての生きとし生けるものとその霊をお迎えし、寺の本堂で経が読まれた後、南向きに配した祭壇に向かい、住職、和尚、檀家の人々と続いて水向けを行う。この祭壇に使われる施餓鬼棚は、大正元年(1912)に名古屋の徳源寺から譲り受けたもので、棚に墨書きが残っている。

一連の行事が終わると、本堂の正面に組まれた台に乗せられた、幢幡<sup>どうばん</sup>と言われる色とりどりの紙旗を台からおろし、皆それぞれに持ち帰る。これは、畑に立てておくと虫よけになるという。

<sup>1</sup> お釈迦様の母が、お腹に白い象が入ってくる夢を見て、お釈迦様を身籠ったと言われている。

<sup>2</sup> お釈迦様の生誕時の逸話を表現した仏像で、生まれてすぐに7歩歩き、右手で天を指し、左手で地を指し、「天上天下唯我独尊」と唱えたという。

<sup>3</sup> 甘茶をかけるのは、お釈迦様の生誕時に、9頭の竜が産湯として甘露の雨を降らせたとの逸話がもとになっていると言われている。



図 2-7-66 施餓鬼会の様子(本堂)



図 2-7-67 施餓鬼会の様子(本堂内)

### イ. 金指の夏祭り(野原神社例大祭)

8月のお盆あけの土曜日には、金指の夏祭りが、野原神社の例大祭と共に行われている。かつては、野原神社の例祭日である8月18日・19日に行われていたが、平成5年(1993)の細江町史発行のころには、日付に優先して土曜・日曜の開催となり、最近では、土曜日のみの開催となった。祭礼の日には、神輿<sup>みこし</sup>渡御<sup>とぎよ</sup>や金指地区各区の屋台の引き回しが行われ、打ち上げ花火もあがる。



図 2-7-68 野原神社神輿渡御



図 2-7-69 各区の屋台

金指の夏祭りは、昭和41年(1965)発行の松尾邦之助著『遠州郷土誌 引佐町物語』にも取り上げられており、このころには行われていたことが確認できるが、その歴史はもっと古く、少なくとも戦前には行われていたと言われている。

例大祭前日には、野原神社内外の清掃や、例大祭の幟<sup>のぼり</sup>立て・注連縄<sup>しめなわ</sup>の飾り付けなどの準備が行われ、当日、午前10時になると、各町の氏子総代ほか大勢の関係者が集まり、野原神社において例大祭の祭儀が執り行われる。午後1時には、新氏子祈願祭の祭儀が行われ、そのあと、境内社(秋葉神社・三光坊神社・箱根神社)、行者様の祭儀も行われる。午後3時30分、神幸祭の祭儀により、神輿<sup>みこし</sup>へ御神体が移され、午後4時30分ごろ、神輿が町内への渡御<sup>とぎよ</sup>のため、野原神社を出発する。

神輿は、10区の市神様と秋葉様や実相寺、鈴木家の前を通過して旧金指街道の坂を下り、途中、金指15区の町内を回ったあと、12区の集会所付近で町内各区の屋台と合流し、さらに坂を下って金指駅前のお旅所<sup>たびしよ</sup>へ向かう。午後6時30分ごろ、金指駅前広場に設置されたお旅所で祭儀を執り行くと、神輿と各区の屋台は、今度は旧街道の坂を上り、途中、西の方向へ

向かい、浜松湖北高等学校北側の通りに並ぶ。ここで、午後8時ごろから、皆で打上花火を鑑賞する。

花火が終わると、屋台はそれぞれの町へ帰り、午後9時に神輿が野原神社へ帰還する。午後9時10分、野原神社で還幸祭の祭儀が執り行われ、御神体が神輿から戻されたあと、祭礼が終了する。

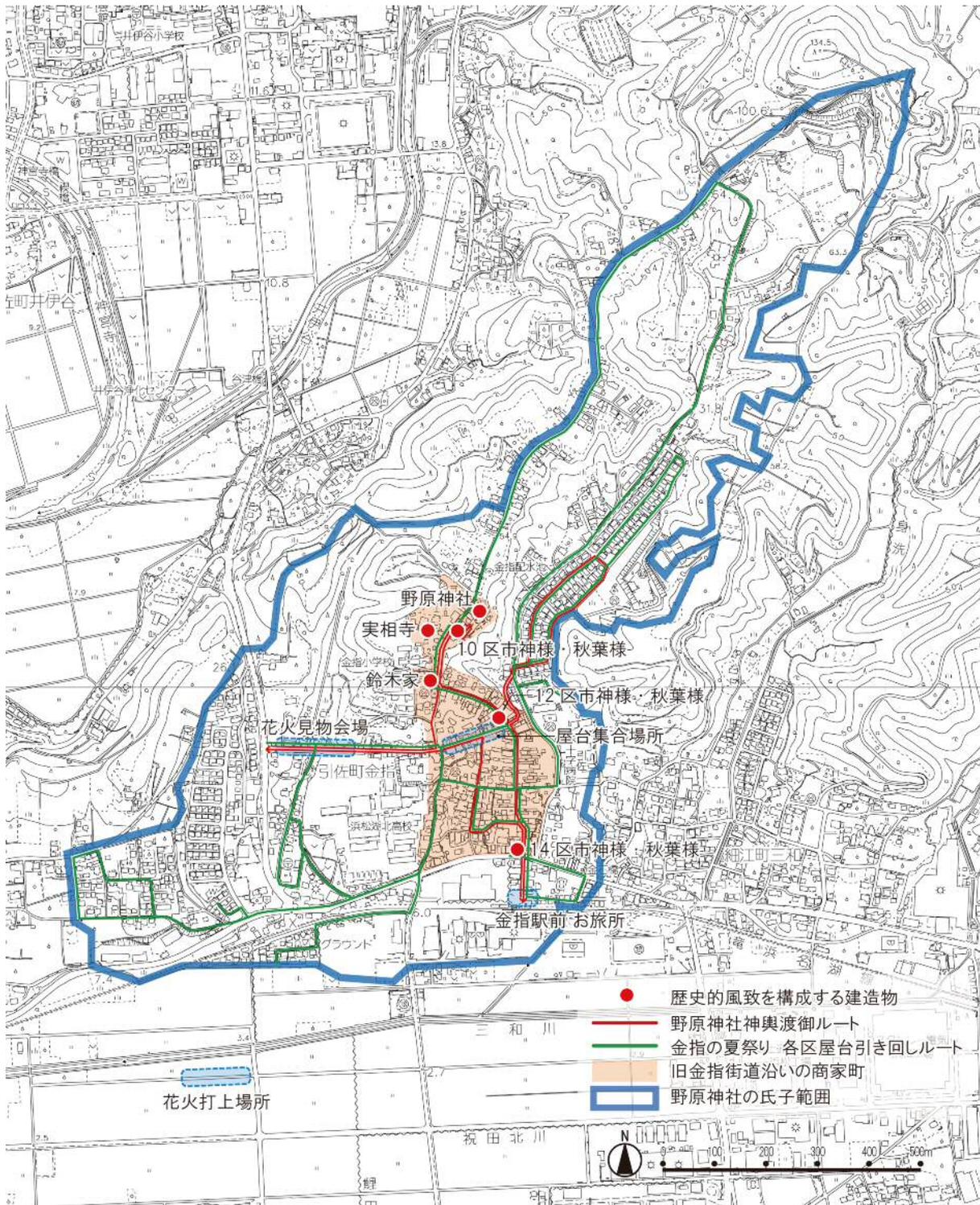


図 2-7-70 金指の夏祭り(野原神社例大祭)の屋台引き回し・神輿渡御ルート(令和元年(2019))

野原神社では、例大祭翌日に片付けや直会が行われる。各区での片付けやそのほかのイベントの有無や日程は、各区によって様々である。

金指の夏祭りの特徴の一つである各区の屋台は、商家町としての繁栄を背景に、野原神社の神輿渡御にお供する行事として発展した。かつてはどの組の屋台も野原神社まで神輿を迎えに坂を上ったが、高齢化や人出不足などにより、現在は野原神社までお供することもなくなり、また、かつては、各区(10区から15区)と若連組の屋台が引き回されたが、現在は、若連がなくなり、6台での引き回しとなっている。そうした変化はありつつも、提灯などで飾り付けられた屋台上では優雅にお囃子が奏でられ、各区の屋台は祭りに彩りを添えている。

花火は、金指の丘陵の下、現在の浜松湖北高等学校の南に広がる水田で打ち上げられ、これを、浜松湖北高等学校の北側に東西に通る通りで、屋台や神輿を停めて皆で鑑賞する。花火は、かつて10区に花火工場があり、その手伝いをすることで安く調達することができたという。現在は花火工場はないが、花火の伝統は受け継いでおり、花火師とともに、地元の数人が打ち上げを手伝い、屋台と共に金指の夏祭りの華となっている。

急な坂道を上る屋台の提灯の灯や花火は、傾斜地にある金指のまちの南側に位置する平野部の中川地区からも見え、賑やかな夏祭りは、金指地区の周辺にまで、その情景を魅せている。



図2-7-71 金指の夏祭りの花火

表2-7-2 金指の夏祭り(野原神社例大祭)スケジュール(令和元年(2019))

行事・時間		内容
夏祭り前日	8:30 ~	野原神社例大祭準備 清掃・幟立て・注連縄飾り付け・お旅所準備・榊準備・参道飾り付け等
夏祭り当日	10:00	野原神社例大祭
	13:00	野原神社新氏子祈願祭
	13:40	野原神社境内祭(秋葉神社・三光坊神社・箱根神社)、行者様の祭儀
	15:30	野原神社神幸祭
	16:30	野原神社神輿 神社御出発～神輿渡御～
	17:20	各区屋台と神輿合流～神輿渡御・屋台引き回し～
	18:30	野原神社お旅所祭儀
	18:50	各区屋台と神輿花火見物場所へ～神輿渡御・屋台引き回し～
	19:45 ~ 20:30	花火打ち上げ見物
	20:30 ~ 21:00	各区屋台・神輿帰路へ
	21:10	野原神社還幸祭
夏祭り翌日	13:00	野原神社例大祭後片付け、直会

#### ④まとめ

金指近藤家の治めた金指地区では、近藤家ゆかりの社寺や市が立ち栄えた町を象徴した商家の建物や市神様・秋葉様などの建造物が残り、町に信仰が根差した実相寺での年中行事や、商家町としての町の繁栄を背景に賑やかに行われる夏祭りなどが行われ、周辺環境と一体となって良好な歴史的風致を形成している。

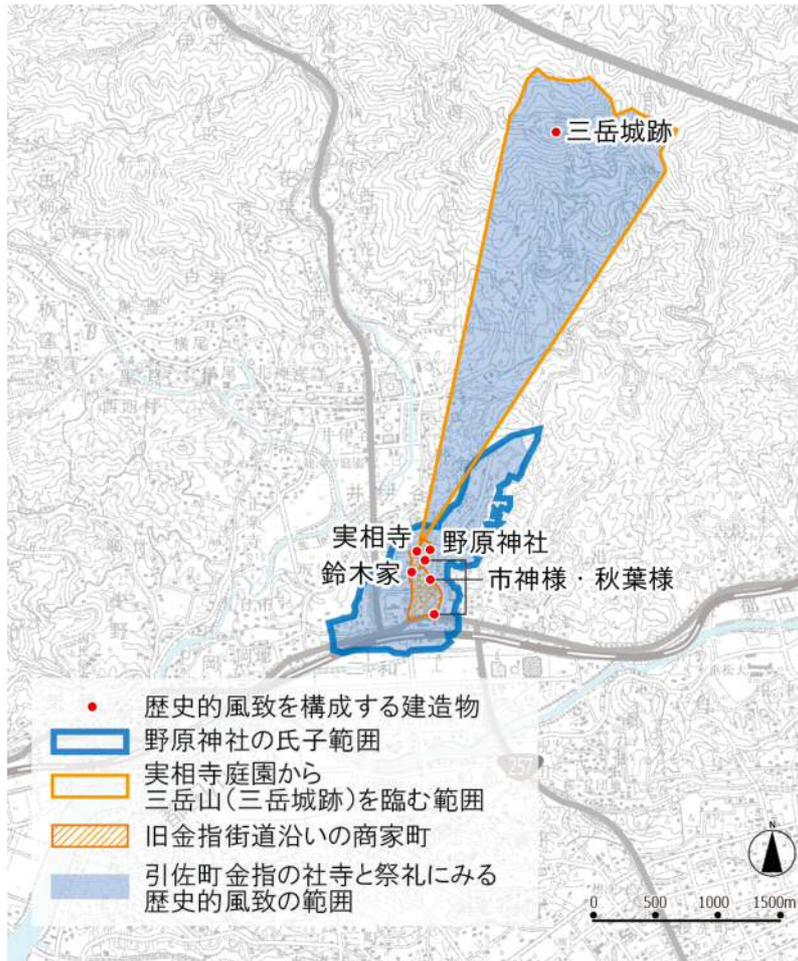


図2-7-72 引佐町金指の社寺と祭礼にみる歴史的風致の範囲

## (7) 細江町気賀の社寺と祭礼にみる歴史的風致

### ① 細江町気賀地区について

気賀地区は、浜名湖の一部である引佐細江湖に都田川が注ぐ河口部にあり、姫街道が通り、近世には宿駅としての気賀宿が置かれ、旗本気賀近藤家がこの地を治めた。かつては現在の気賀四ツ角付近に冠木門かぶきもんがあり、関所が置かれ、その敷地内には本番所や向番所などがあった。現在も本番所の一部が残っている。

近年まで比較的残っていた近世の気賀宿のまち並みは、建て替えが進み、その面影をみることは難しくなってきたが、気賀宿の南を東西に流れていた要害堀ようがいぼりの一部や、気賀宿の西口の石積みの枳形ますがた、気賀の人々の厚い信仰を受けた細江神社や藺草神社いぐさが残り祭礼が行われるなど、多くの歴史遺産が残されている。

### ② 歴史的風致を構成する建造物

#### ア. 細江神社

明応地震(1498年)で流失した新居あらい(現静岡県湖西市)の角避比古神社つのさくひこの御神体が赤池あかいけの里に流れ着き、永正8年(1511)に現在の地で牛頭天王ごすてんのうとして祀られたと伝わる。明治元年(1868)に細江神社と改称され、境内には八幡宮いぐさ、藺草神社など多くの境内社がある。

細江神社の社殿は、間口6間、奥行3間3尺、入母屋造、瓦葺の拝殿に、幣殿が接続し、間口7尺5寸、奥行6尺、銅板葺の本殿と続く権現造ごんげんづくりの建物で、本殿と拝殿は、これらの改築時の棟札から、天保2年(1831)の建物とわかる。

角避比古神社の御神体が流れ着いたと伝わる場所には現在、赤池様公園があり、毎年7月中旬に行われる細江神社祇園祭では、神輿に乗った御神体がこの赤池あかいけに巡行し、神事が執り行われ、多くの人で賑わう。

#### イ. 気賀関所

気賀関所は気賀近藤家によって警護され、明治2年(1869)まで姫街道の通行者を取り締まった。当時、関所には本番所、向番所、遠見番所、冠木門等が設置され、周囲には堀や石垣、瓦屋根堀、矢来がめぐらされていた。現在も本番所の一部(下ノ間、勝手部分)が残る。

関所の表門にあたる冠木門は、気賀宿の東入口にあたり、気賀四ツ角の辺りにあったと伝わる。



図2-7-73 細江神社拝殿

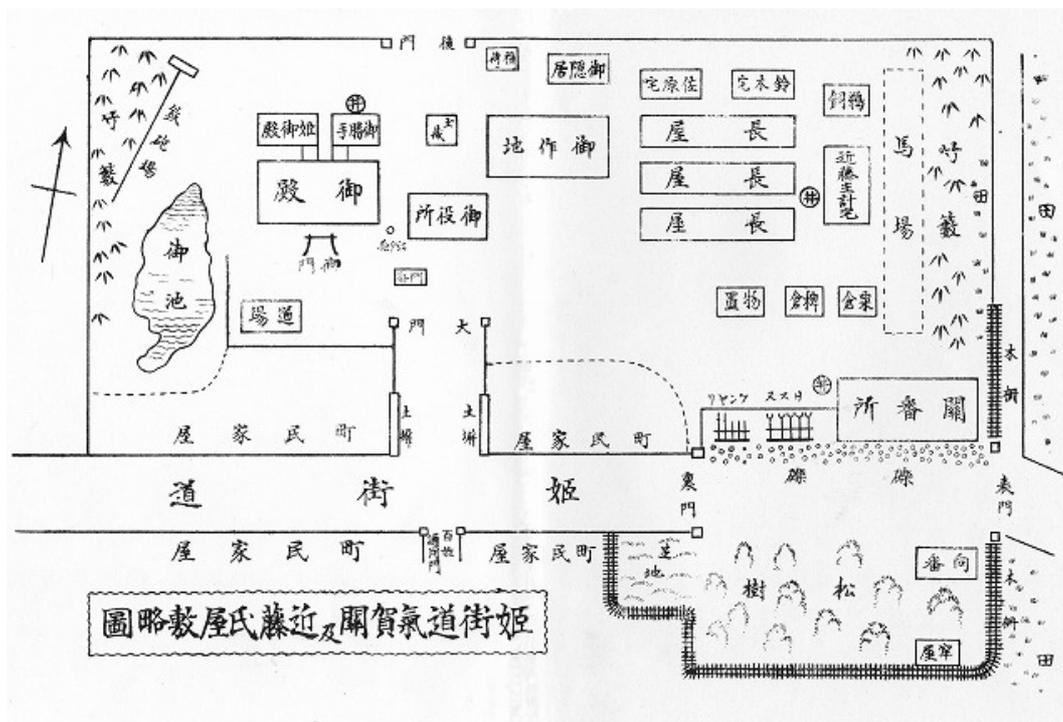


図2-7-74 気賀関所と気賀近藤家陣屋の配置図

本番所の屋根は慶長6年(1601)の創建当時は茅葺であったが、寛政元年(1789)に柿葺・妻破風造、狐格子・瓦棟に改築された。その後、嘉永7年(1854)の安政東海地震で被害を受けたため、屋根が改修された。<sup>1</sup>

本番所は全国で最古の関所建物として昭和35年(1960)までほぼ完全な形で現存していたが、ほとんどが解体され、現在ではその一部が民家の一部として残されているのみである。残っているのは、正面左側の3分の1程度であるが、屋根の妻破風造、狐格子が良く残り、昭和41年(1966)には、当時の細江町により、町の文化財に指定され、平成19年(2007)には合併した浜松市の文化財に指定されて現在に至る。



図2-7-75 気賀関所本番所

なお、江戸時代の文書や現存する本番所の一部などを参考として、平成元年(1989)度、細江図書館の南西に気賀関所として冠木門や本番所などの関所の主要な建物が復元されている。また、姫様館を併設し、江戸時代の駕籠や宿札、手形など関所に関わる資料などが展示されている。

<sup>1</sup> 寛政期以降の本番所の屋根の構造については、昭和35年(1960)当時の実測図や、昭和41年(1966)当時の町指定文化財台帳、平成12年(2000)発行の細江町史などの資料があるが、屋根葺材や屋根形状についての記述は統一されておらず、写真も残っていないため、詳細ははっきりしない。

## ウ. 藺草神社

浜名区細江町気賀の細江神社の境内社の一つで、宝永地震(宝永4年(1707))による津波で塩害や田畑流出により被害を受けた領内に、塩害に強い藺草栽培を普及した近藤用随を祀る。その後、藺草栽培と畳表生産は昭和30年代まで当地域の主要産業となった。このようなことから、藺草神社は復興の神様としても崇敬されている。



図2-7-76 藺草神社

昭和40年代以降、この地の産業構造は変化し、産業としての藺草栽培は行われなくなってしまう

たが、神社横の田では近藤氏の普及させたものと同じ琉球藺が植えられ、近藤氏の顕彰も続けられている。

藺草神社の創建は不詳であるが、文久2年(1862)の再建の棟札が残っている。現在の社殿は、本殿が間口1間・奥行5尺、拝殿が間口3間・奥行2.5間の木造瓦葺の建物で、『細江町史』や昭和44年(1969)発行の『細江町の百年』によると、「皇紀<sup>1</sup>二千六百年」と刻まれた灯籠と同じく、昭和15年(1940)、皇紀2600年を記念して改築されたものである。

## ③ 細江町気賀にみられる活動

### ア. 細江神社祇園祭

#### a. 細江神社祇園祭の云われ

7月中旬(通常は第3土曜と日曜)に行われる細江神社の例大祭は、神社で最も重要な祭りとされ、祇園祭と呼ばれている。祇園祭は牛頭天王の祭りであり、夏に向かって疫病などを封じ込めるお祭りで、全国各地で行われている夏の行事であるが、細江神社の祇園祭は、神輿や出引き<sup>2</sup>が賑やかに町を練り歩くだけでなく、日曜には御神体が浜名湖上を舟で渡る、珍しい特徴がある。

これは、地震によって御神体が気賀の里(浜名区細江町気賀)に流れ着いたことに由来する。『細江神社誌』によれば、明応7年(1498)の大地震によって「新居にあった角避比古神社も流没したが、奇跡的にご神体は村櫛をへて、伊目の十三本松に漂着したのであった。里人は隠岐大明神の地に仮宮を建ててこれを祭ったが、十二年後(永正7年(1510))、再び地震による大津波のためご神体は気賀の赤池へご漂着された。気賀の里人はこの地に仮宮を建てて祭り、翌月十九日に、八王子権現の境内(現在の場所)へ移し、牛頭天王社と称しお祭りすることとなった。」とあり、細江神社の祇園祭は、こうして気賀の里へ流れ着いた神様を湖に戻

<sup>1</sup> 日本書紀に記された初代天皇である神武天皇の即位の年を元年とする日本独自の紀元表記で、皇紀元年は西暦でいうところの紀元前660年とされる。

<sup>2</sup> 屋台(太鼓台)のこと。出引き屋台ともいう。

し、地震や津波の災害から地域を守る神様として各地を回ってから細江神社に戻る行事である。

細江神社の祇園祭がいつから行われていたかは定かではないが、宝永地震(宝永4年(1707))より数十年にわたりお神輿が舟に乗って浜名湖を下る祇園祭は途絶えていた。しかし、延享5年(1748)の祇園祭の定書に神輿渡御の再開と舟渡御を含む祭りの流れの記載があることから、このころには行われていたことが確認できる。

## b. 細江神社祇園祭の流れ

### ■ 例祭準備

例祭の準備は例祭の二日前に行われる。氏子総代らが集まり、幟旗を立て、提灯をつけるなどの飾り付けを行うほか、お仮屋を設え、また、渡御のための神輿を拝殿内へ運び入れる。境内には、奉賛者の名札も貼り出される。

準備が終わると、夕祭が斎行され、修祓や玉串奉奠などの神事が行われる。

### ■ 例祭一日目

例祭当日、午前には、献幣使参向<sup>1</sup>のもと、細江神社の例大祭が斎行され、続いて、境内社である八柱神社の例祭も行われる。

例大祭では、修祓や献饗に続き、献幣使により祝詞が奏上され、その後、細江神社宮司の祝詞、巫女神楽奉納、玉串奉奠と続く。

午後からは、赤池神幸祭が行われる。細江神社の本殿において、赤池神幸祭が斎行され、幕の内で御神体(御祭神である素戔嗚尊(牛頭天王)の御霊)を神輿へ移したあと、赤池に向けて、神輿の行列が発する。赤池は、細江神社より東南約300メートルの所であり、細江神社の御神体が最終的に流れ着いたところで、「赤池様」と呼ばれており、現在は公園として整備されている。この赤池様公園のすぐ南を流れる要害堀の護岸には、飛び出た石材が所々に見られるが、これは舟をつなぐためのものであり、現在は住宅地となっているこの地が、浜名湖の湖岸であったことをうかがい知ることができる。

赤池御神幸の行列は、神輿のほか、御神号などの旗持ちや、長柄、鷹匠、巫女神楽を舞う巫女などがおり、なかでも、鷹匠が同行することはめずらしい。



図2-7-77 赤池御神幸行列



図2-7-78 出引きと華やかな浴衣姿の若者

<sup>1</sup> 神社本庁からの使いとして、近所の名のある神社から代役が立てられ、例祭に同席する。令和元年(2019)度については、浜名区引佐町井伊谷にある井伊谷宮の宮司が務めた。

要害堀そばの赤池<sup>あかいけ</sup>お旅所に到着すると、祭儀を還幸し、祝詞奏上や巫女神楽の奉納、玉串奉奠のあと、餅投げが行われる。餅投げの紅白の丸餅は、地元の菓子店で作られ、神様のお餅であるから、焼かずに食べると良いという。餅投げのあと、神輿の行列はお旅所をあとにして、行きと同様のルート<sup>ほそえ</sup>をたどり、細江神社の境内にあるお仮屋に帰着する。お仮屋では、奉安祭が斎行され、巫女神楽が奉納される。このあと、神輿はこのお仮屋で一晩を過ごし、氏子が交代で神輿をお守りする。

夕刻からは、笹に提灯を付けて飾り付けた「出引き」と呼ばれる屋台(太鼓台)が気賀関所の本番所の一部も残る市街を巡行する。出引きには、華やかな浴衣を着た若者がつき、笛と太鼓で賑やかに<sup>はやし</sup>お囃子を囃す。お仮屋で奉安祭が行われているさなか、細江神社東側の沿道に各町の出引きが集合してくるが、坂を駆け上がってくるものもあり、祭りの熱気は最高潮である。出引きの行列には、巫女神楽や鷹匠も追従し、賑やかなお囃子と色とりどりの浴衣姿の行列で、街中は華やかで賑やかな祭りの雰囲気<sup>ほそえ</sup>に包まれる。

### ■例祭二日目

日曜日は、まず、細江神社の本殿において、初宮初氏子祈願祭<sup>ほそえ</sup>が行われ、午後になると、神輿の海上渡御神幸祭が行われる。細江神社のお仮屋にて神幸祭<sup>ほそえ</sup>を斎行し、巫女神楽を奉納したあと、神輿は神輿車に乗せられ、神幸祭の行列が海上渡御に向け井口河岸へ出発する。神輿の行列には、鷹匠・母衣傘・猿田彦・巫女神楽の巫女などがおり、この神輿の行列の後ろに、出引きの行列が付き従い、前日にまして華やかな行列となる。

一行が河岸に到着すると、屯倉水神社北水門で海上安全祈願祭を斎行し、巫女神楽を奉納する。その後、神輿と出引き・巫女等諸役は、別れて舟に乗り込み、浜名湖上を渡る舟渡御<sup>ふなとぎよ</sup>となる。

舟渡御へは、神輿をのせたお神輿船を先頭に、各地域の船屋台が出発をする。

船は引佐細江湖(浜名湖の一部)を舟渡御して、お神輿船のみ寸座<sup>すんざ</sup>を経由し、寸座の人々の参拝を受けたあと、西気賀の五味半島(通称プリンス岬)に到着・上陸する。そして、細江神社を目指して各所で御祭儀及び巫女神楽を奉納しながら陸渡御が始まる。街道を神輿と出引きが通るときには、沿道の住民はお参りをして行列を見守っている。夕刻になると提灯にも灯りが入り、行列に艶やかさが加わる。

神輿が細江神社に到着すると、本殿で還御祭が行われる。各



図2-7-79 細江神社祇園祭 神幸祭行列



図2-7-80 細江神社祇園祭 舟渡御

<sup>1</sup> 子供がめでたく無事誕生したことに対し、神様に安産を祈った感謝と、将来無事に成長するよう、神様の御加護を祈願する初宮詣と、初嫁・初婿・転入転居によって初氏子となった人の家内安全と無事息災を祈願する初氏子入祈願祭。

町の出引きも、神社に到着すると、鳥居を通るのに出引きを一度寝かせるが、その間も太鼓を打ち鳴らし続け、鳥居を過ぎると提灯を振り回しながら上がっていく。境内は笛と太鼓の音で最高潮に達している。社内で陸渡御を終えた御神体を納めると境内から各出引きは去っていく。

### ■例祭翌日

二日間にわたる例祭の翌日には、氏子総代らが集まり、祭事諸用具等の片付けが行われる。幟旗や奉納提灯などが片付けられ、神輿も拝殿から移される。

片付けが終わると、奉賛祭が斎行され、修祓や玉串奉奠などの神事が行われ、祇園祭が終了する。

表2-7-3 細江神社祇園祭スケジュール(令和元年(2019)、一部予定を含む)

行事・日程		内容	
例祭前々日	8:00	例祭準備	
	17:00	夕祭	
例祭1日目	10:00	例大祭	
		八柱神社例祭	
	14:00	赤池神幸祭	赤池神幸祭 赤池御神幸行列 奉安祭(巫女神楽奉納)
	16:00	出引屋台市街巡行	
例祭2日目	10:00	初宮初氏子祈願祭	
	13:30 13:45	神輿海上渡御神幸祭	海上渡御神幸祭(巫女神楽奉納) 海上渡御神幸祭行列
			海上安全祈願祭(巫女神楽奉納) 舟渡御
	15:00		
	16:00		陸渡御
	19:10	還御祭	
20:30	出引屋台解散		
例祭翌日	13:30	祭事諸用具等の片づけ	
	17:00	奉賛祭	

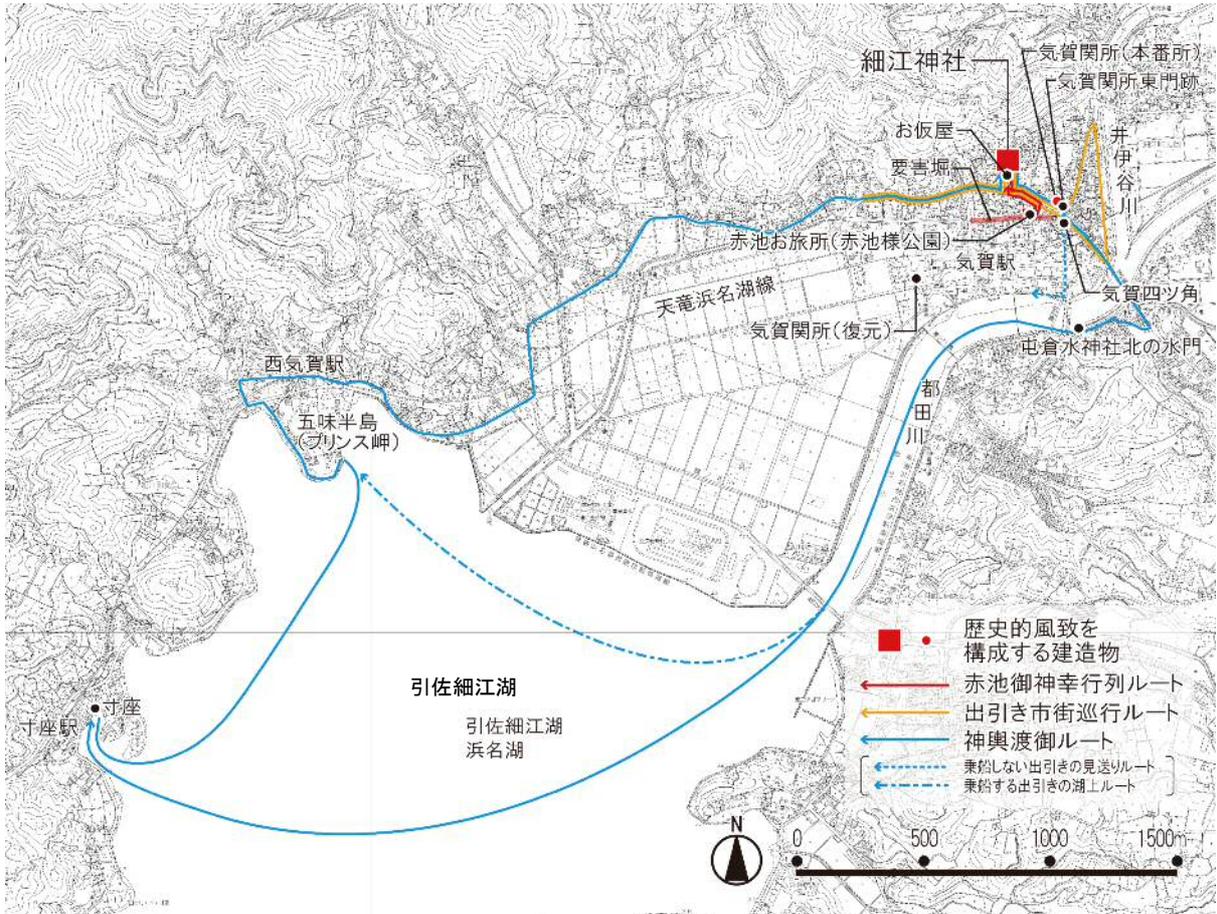


図2-7-81 細江神社祇園祭(赤池御神幸行列、出引屋台市街巡行、海上渡御)のルート(令和元年(2019)、一部予定を含む)

### イ. 蘭草の生産・販売に関わった人々の信仰

浜名湖北岸地域は、昭和30年代まで、蘭草の栽培と畳表の生産が盛んであった地域である。この地に蘭草栽培と畳表の製造を広めたのは、気賀近藤第6代領主近藤用随で、細江神社の境内には、用随を祀る蘭草神社がある。

用随は、宝永地震(宝永4年(1707))による津波で田畑流失や塩害といった壊滅的な被害を受けた人々のため、豊後(現在の大分県)で生産されている畳表の原料の琉球蘭が塩害に強いと聞き、その苗を豊後国領主松平氏に分けてもらい気賀に持ち帰り、栽培と畳表の製造を奨励して、この地の危機を救った。また、蘭草を気賀近藤家領地の特産品とするため、外部への持ち出しを厳重に管理したため、次第に蘭草の栽培と畳表の生産が浜名湖北岸地域に広く普及し、昭和30年代まで、この地域の主要な産業となった。



図2-7-82 蘭草神社(例祭日当日)

浜名湖北岸地域には、呉石学校跡、気賀近藤家墓所、高栖寺など、ほかにも蘭草に関わる

古跡や顕彰施設が多いが、なかでも藺草神社は、近藤用随の遺徳をたたえて建てられたものである。また、藺草神社が昭和 15 年(1940)、皇紀 2600 年を記念して改築された際、鳥居や灯籠も奉納されているが、ここには寄附人として「遠江豊表同業組合」「商人會有志」と彫られており、ここからも、藺草及び豊表に関わる産業の関係者が、藺草神社及び近藤用随を厚く信仰していたことが伺える。

そして、藺草栽培及び豊表の製造が衰退した現在でも、毎年、氏子総代らが、藺草神社の横の 1 メートル四方ほどの田へ、用随が奨励したものと同じ琉球藺を植え、藺草栽培の歴史を後世に伝えている。また、神社東側の吉野屋の土地は、かつて気賀近藤家陣屋の一部で、近藤用随が藺草を試植えしたと伝わる池があり、ここでも、毎年藺草が植えられている。



図2-7-83 藺草神社例祭の様子

また、近藤用随の命日とされる 7 月 14 日<sup>1)</sup>には、藺草神社において例祭が斎行される<sup>2)</sup>。この日は、拝殿に奉納提灯も掲げられ、多くの関係者が集まる。出席者には、地区総代や細江神社の総代のほか、農協関係者も呼ばれ、藺草の栽培・販売により、この地を救った近藤用随の遺徳をたたえて祭儀が執り行われている。

<sup>1)</sup> 江戸幕府に届け出られた日は 7 月 14 日であるが、実際には、7 月 11 日に亡くなったとされる。

<sup>2)</sup> 藺草神社の例祭は、通常は 7 月 14 日に行われるが、細江神社祇園祭の日程との重複を避けるため、日程をずらすこともある。

#### ④まとめ

気賀地区には、災害の歴史が残る地域ならではの祭礼や水害(塩害)に強い藺草いぐさの栽培を奨励した気賀近藤家きがに関わる建造物と行事が今なお守り伝えられ、周辺環境と一体となった今後も守り伝えたい良好な歴史的風致を形成している。

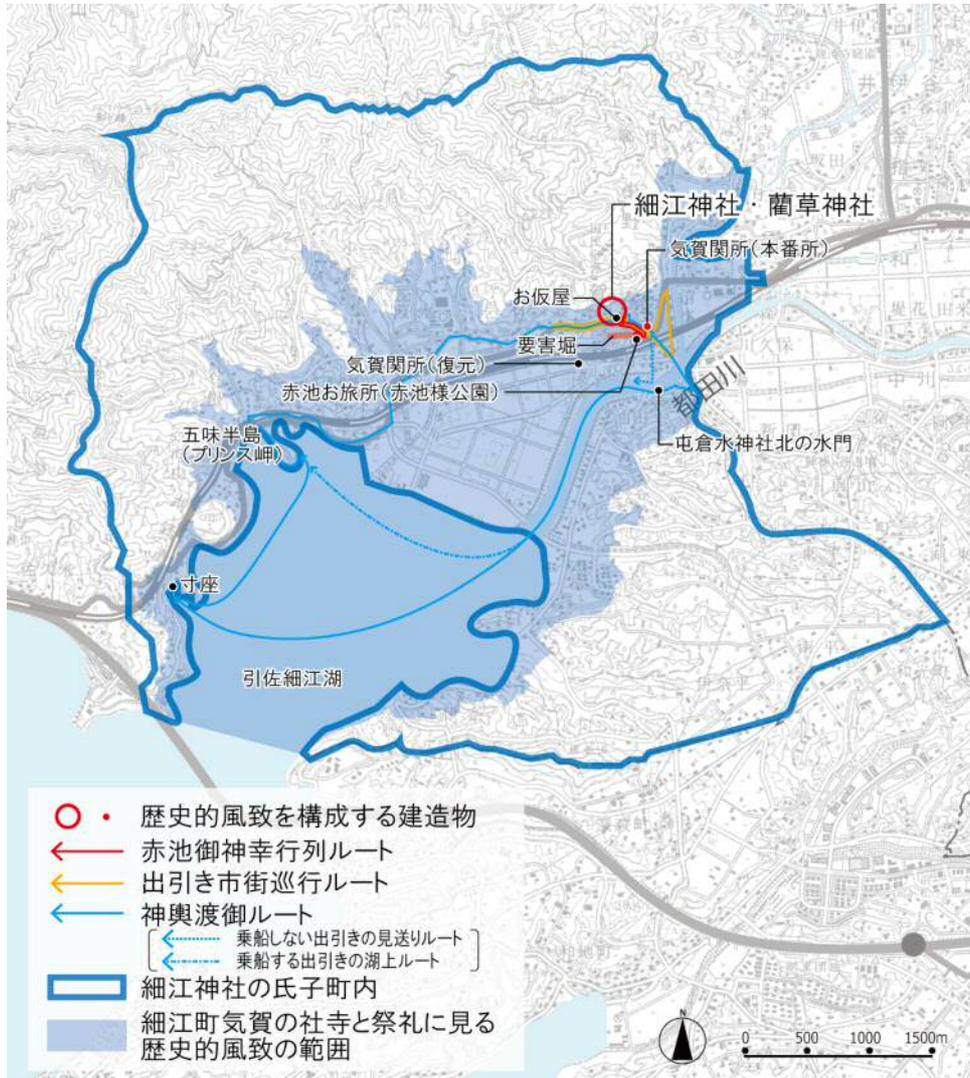


図2-7-84 細江町気賀の社寺と祭礼にみる歴史的風致の範囲

## (8) 細江町中川周辺の社寺と祭礼にみる歴史的風致

### ① 細江町中川周辺の地区について

浜名区細江町中川は、三方原台地の北縁に位置し、北部を、浜名湖の一部である引佐細江湖に注ぐ都田川が西流する、都田川下流域にあたる地域で、銅鐸が出土するなど原始・古代からの人々の生活の足跡が残り、南西部の姫街道沿いに残る歴史的建造物や、北部には宝林寺が所在するなど、多くの歴史遺産が残る地域である。また、この辺りには、かつて伊勢神宮の荘園が設定されていたこともあり、現在でも水田が多い。

宝林寺は、領内の新田開発や殖産興業に治績をあげた、領主であった金指近藤家の貞用が開創させた寺で、領民の撫育と心のよりどころとして最も尊敬できる明僧を迎えたのだらうと『細江町史』（通史編中、平成12年(2000)発行）は推測している。江戸時代に開創した宝林寺と黄檗宗は、領民に受け入れられ、これに関わる信仰は今なお続いている。また、刑部地区には観音堂（もともとは妙功庵と呼ばれたお寺）が建てられ、念仏講が続けられているなど、中川周辺の地区にはのどかな農業地帯に特徴的な社寺と行事が残されている。

### ② 歴史的風致を構成する建造物

#### A. 宝林寺

宝林寺は初山と号し、寛文4年(1664)に、領主で徳川家譜代の旗本金指近藤家の2代目近藤貞用が隠元禅師と共に明国から来日した弟子の独湛禅師を招いて、近藤家の菩提寺として開創された黄檗宗の寺院である。最盛期には、約5万坪の敷地に仏殿、禅堂、齋堂、廻廊など、20棟を超える伽藍が整然と配置され、異国情緒に満ち溢れ、遠州地方における



図2-7-85 仏殿

黄檗布教の中心地として栄えたが、明治以後、近藤家の庇護を失い、廃仏毀釈等の影響もあり、堂宇の大半が失われた。しかし、黄檗宗建築のなかで宇治の萬福寺とともに伝来初期の建築であり、黄檗宗特有の様式をよく示した仏殿や方丈、形式及び手法から17世紀後半ごろの建築と推定されている山門などが残り、現在の境内には、これら山門・仏殿・方丈が縦の軸線上に並び、他に報恩堂・庫裏・龍文堂・土蔵などが立ち並んでいる。

重要文化財に指定されている仏殿は、建築部材の墨書により寛文7年(1667)の建物であることが確認されており、正面1間通りを吹放しとした桁行5間、梁間6間の堂で、屋根は入母屋造柿葺、床面を瓦敷きとするなど、黄檗宗独特の様式で建てられている。仏殿では、毎年8月に施餓鬼供養が行われ、多くの参拝者で賑わう。

同様に重要文化財に指定されている方丈は、棟札によると正徳6年(1716)の建物で、桁行

<sup>1</sup> 中国大陸の歴代王朝の一つである明国の文化のなかで育まれた宗教の僧。

10間、梁間6間半、屋根は寄棟造茅葺。東面南寄りに桁行2間、梁間3間の玄関が付き、さらに東側に庫裏が接続する。内部の間取りに、<sup>おうぼく</sup>黄檗宗寺院の方丈にみられる特徴が見受けられるなど、仏殿同様、黄檗宗独特の様式をよく示している。

また、境内には、<sup>きんめいせき</sup>金鳴石と呼ばれる石があり、現代では、金のなる石として金運上昇・商売繁盛などの御利益を求めて、参拝者がこの石を傍に置かれた小石で叩いて鳴らしていく。この石は、享和3年(1803)に成立した『遠江古蹟図絵』に、「<sup>しよさん</sup>初山の石<sup>せつ</sup>鼓」として取り上げられ、石を叩く姿も描かれている。ほかの石像同様、中国から運ばれてきたものと言われており、境内は、<sup>おうぼく</sup>黄檗文化とともに大陸的な要素が多く残されている。



図2-7-86 金鳴石と石像

### イ.妙功庵観音堂

妙功庵観音堂は、もとは妙功庵と呼ばれたお寺で、古くから念仏講が行われてきた。

建物は、桁行3間、梁間3間、瓦葺の屋根は正面が入母屋造、背面が切妻造で、木造平屋建ての主要部分に下屋が接続する小規模なお堂である。中は正面の祭壇に阿弥陀如来像や閻魔像が祀られ、その手前には、<sup>ひやくまんべん</sup>百万遍念仏を唱える10帖ほどの空間が設けられている。



図2-7-87 妙功庵観音堂

平成27年(2015)に保存修理工事を行っているが、工事前の堂内壁面に掲げられていた堂宇再建時の寄附人を記した木札から、現在の堂宇は明治28年(1895)の再建であることがわかっている。

## ③<sup>ほそえ</sup>細江町<sup>なかがわ</sup>中川周辺にみられる活動

### ア.<sup>ほうりんじ</sup>宝林寺にみる<sup>ほうりんじ</sup>信仰と<sup>ほうりんじ</sup>宝林寺の伝えた文化

<sup>ほうりんじ</sup>宝林寺は<sup>しよさん</sup>初山と号し、近藤家の菩提寺として開創された<sup>おうぼく</sup>黄檗宗の寺院であり、<sup>おうぼく</sup>黄檗文化といわれる独特の文化を日本にもたらした。また、石像や<sup>きんめいせき</sup>金鳴石など、中国の石工による作品や中国から持ち込まれたと言われるものも多く存在し、ほかの宗派の寺院とは異なる様相を呈している部分が多い。

### a. 金鳴石への信仰

境内の龍文堂のそばに、「金鳴石」と呼ばれている大きな平たい石が置かれている。寺伝によると、通称「ちんちん堂」と呼ばれていた開山堂が、現在のお堂よりももう少し西にあり、その御神体であったとのことだが、現在の境内には開山堂はなく、金鳴石にはお堂といった上屋はない。また、口伝では、宝林寺開創の独湛禅師が、明(中国)より持ち込んだと言われており、石には「支那金鳴石初山永宝」と彫り込まれている。小石でたたくと金属のような澄んだ音が鳴り、金運上昇・商売繁盛に御利益があると伝えられている。

この金鳴石については、享和3年(1803)に成立した『遠江古蹟図絵』に、「初山の石鼓」として取り上げられている。参詣者は、この石をたたいて念仏を唱えたともいわれ、遠江古蹟図絵にも小さな石で金鳴石をたたく姿が描かれている。また、現在でも、金のなる石として、金鳴石の御利益にあやかろうと、詣者の姿が見られる。

### b. 黄檗宗の伝えた文化(施餓鬼供養)

黄檗宗は、ほかの宗派に比べて寺院こそ少ないが、主に大皿から取り分けて食し、円卓の伝来にもつながった普茶料理や、煎茶道など、黄檗宗が日本に伝えた文化やものは、我々の生活に深く関わっている。

施餓鬼法要もその一つで、黄檗宗により日本に伝わったと言われている。ただし、曹洞宗や臨済宗といった黄檗宗以外の宗派の施餓鬼は、見た目こそ黄檗宗のものとよく似ているが、黄檗宗のそれとは様々な面で異なる。

毎年8月15日、宝林寺の仏殿では、施餓鬼が行われ、黄檗宗の僧侶が施餓鬼供養のお経を読み、檀家など、多くの参列者が同席する。

施餓鬼当日、宝林寺の山門には「蘭盆勝会」と貼り出され、仏殿の入り口にも、「瑜伽道場」の垂れ



図2-7-88 龍文堂にお参りしてから金鳴石を鳴らす



図2-7-89 金鳴石を鳴らす姿

龍文堂にお参りし、金鳴石を鳴らす参



図2-7-90 施餓鬼供養のため、仏殿に向かう人の姿



図2-7-91 宝林寺施餓鬼供養(仏殿内)

幕が取り付く。仏殿入り口外のかき壇には、初盆のお供えがおかれ、仏殿の中は持ち寄られた花も含め、たくさんの花で飾られる。受付では、来場者全員にお菓子が配られる。施餓鬼は、黄檗宗以外の宗派では、<sup>せじきもん</sup>施食文と言われるお経を読むのみであるが、<sup>おうぼく</sup>黄檗宗では、五方五仏の宝冠を被った導師を囲んで和尚がおりんや木魚・太鼓などの鳴り物を持って机を中心に並び、鳴り物を鳴らしながら、賑やかに、リズムカルにお経を読み上げ、まるで歌を歌うかのようなようである。導師と和尚によるお経は、鳴り物でリズムを細かく刻み、早口で唱和される。リズムやスピードは、刻一刻と変化する。途中、お経が読み上げられる一方で、卒塔婆の戒名も読み上げられ、卒塔婆を受け取った檀家の方々が順にお焼香をしていく。

お経は、本来はとても長く、文言も多いものであるが、略され、スピードも速く読み上げられる。こうして、本来12時間ほどかかるお経を1時間40分ほどで、鳴り物を鳴らしながらリズムカルにとなえたのち、功德をまく意味合いで、お餅がまかれて法要が終了する。

この<sup>せがき</sup>施餓鬼法要は、享和3年(1803)に成立した『遠江古蹟図絵』に、「<sup>しよさん</sup>初山の石鼓」として取り上げられている記述のなかに、<sup>ほうりんじ</sup>初山(宝林寺)での<sup>せがき</sup>施餓鬼の記載もあり、少なくともこのころには行われていたことが見て取れる。

また、<sup>ほうりんじ</sup>宝林寺に残されている<sup>せがき</sup>施餓鬼で使用される五方五仏の宝冠には、天保3年(1832)の記載があるものが残るほか、その箱書きには、「文化十三丙子歳(1816)」の記載も見受けられる。

<sup>ほうりんじ</sup>宝林寺では、こうした<sup>おうぼく</sup>黄檗宗特有の伝統的な法要やお経が、今もなお引き継がれており、<sup>せがき</sup>施餓鬼当日には、黒い服に身を包み、花などを持ち寄る人々の姿が見られるなど、地域の人々を巻き込みながら実施されている。

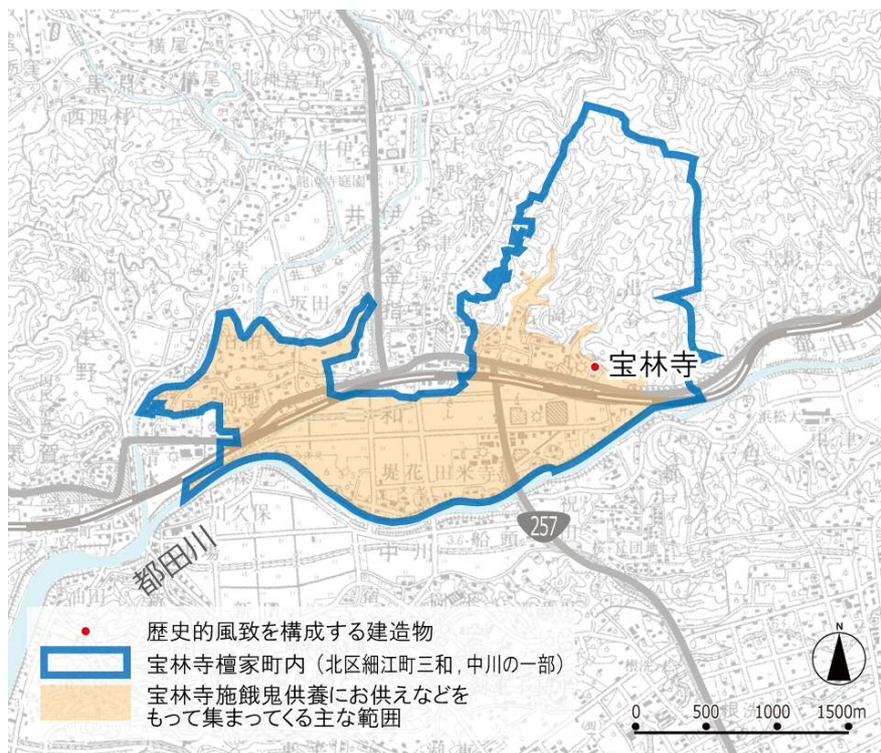


図2-7-92 宝林寺施餓鬼供養にお供えなどをもって集まってくる主な範囲

## イ. 百万遍念仏と念仏講

浜名区細江町中川の妙功庵観音堂では、百万遍念仏と念仏講が、およそ300年以上前から続けられており、「妙功庵観音堂の百万遍念仏と念仏講」として市の無形民俗文化財に指定されている。

百万遍念仏と念仏講は、日本各地で行われてきた信仰を背景とした活動であるが、妙功庵観音堂のある刑部地区には、百万遍念仏と念仏講という地区住民の活動とともに、これを行う場であるお堂が残り、刑部地区は、活動と活動の場がセットで残る貴重な地区となっている。

百万遍念仏は、無病息災・病氣平癒を願ったのが始まりと言われ、元禄年間(1688-1704)には特に盛んであった。また、正徳2年(1712)に、刑部地区の住民から寄進された鱧口<sup>わにぐち</sup><sup>1</sup>が伝えられている。また、平成27年(2015)の保存修理工事前の堂内壁面には堂宇再建時の寄附人を記した木札とともに奉納された百万遍念仏の巻物(金剛般若波羅蜜経)が掲げられており、現在の堂宇再建時の明治28年(1895)には百万遍念仏や念仏講を行っていたことが確認できる。



図2-7-93 百万遍念仏

百万遍念仏は、刑部地区の人々が集まり、毎年1月の成人の日の昼過ぎから行われている<sup>2</sup>。

準備は当日の午前中に行われる。お供え物などをもった住民が集まってきて、掃除や幟立て、お供え物や道具の準備、境内での焚き木や振る舞いものの準備を行う。そして午後1時、お堂の中で車座になって座り、百万遍念仏が始められる。長さ約8メートルの数珠を皆で回しながら念仏を唱え、一年の無



図2-7-94 百万遍念仏の際の境内の様子

事と健康を祈る。数珠の珠数は1,080個と言われている。数珠は、鉦<sup>かね</sup>の音や木魚に合わせて、約1時間かけて、南無阿弥陀仏と念仏を唱えながら100周回す。何回回ったかは、木札で数を印す。外では、参詣者に甘酒や焼餅が振る舞われる。念仏のあとは、地元の中川寺住職<sup>ちゅうせんじ</sup>の読経がある。

また、毎月の念仏講は、「お観音様」あるいは毎月9日に行われることから「ココノカ」と呼ばれ、百万遍念仏同様、現在も続けられている。地域の人々が早朝から掃除をし、持ってきたお花やお酒を供え、夜7時ごろから約30分念仏をあげる。念仏が終わると、かつては、

<sup>1</sup> 社殿・堂正面の軒下につす金属製の音響具。

<sup>2</sup> かつては、夜に行われていたが、15年ほど前(平成17年(2005)頃)から昼間に行われるようになった。

お供えや持ち寄ったお菓子などを食べながら世間話を楽しみ、交流の場ともなっていた。

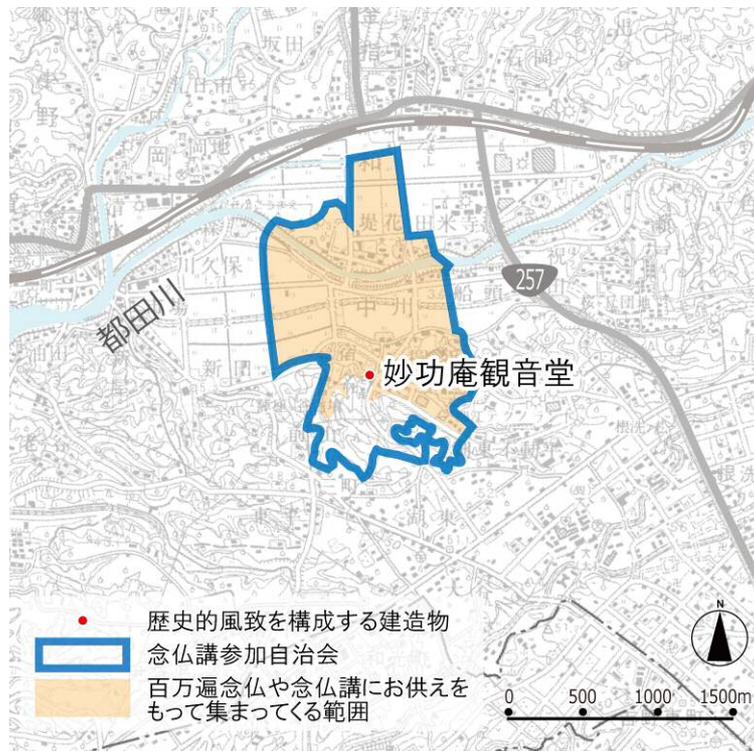


図2-7-95 百万遍念仏や念仏講にお供えをもって集まってくる範囲

#### ④まとめ

中川地区には、この地を治めた金指近藤家ゆかりの寺や信仰が残り、近藤家の菩提寺として開創された宝林寺<sup>ほうりんじ</sup>では、黄檗宗独特の施餓鬼供養が行われるなど特徴ある信仰が続いている。また、刑部地区でも、妙功庵観音堂での百万遍念仏と念仏講が続けられているなど、中川周辺の地区にはのどかな農業地帯に特徴的な社寺と行事が残されており、それらが一体となってその地特有の守り伝えたい歴史的風致を形成している。

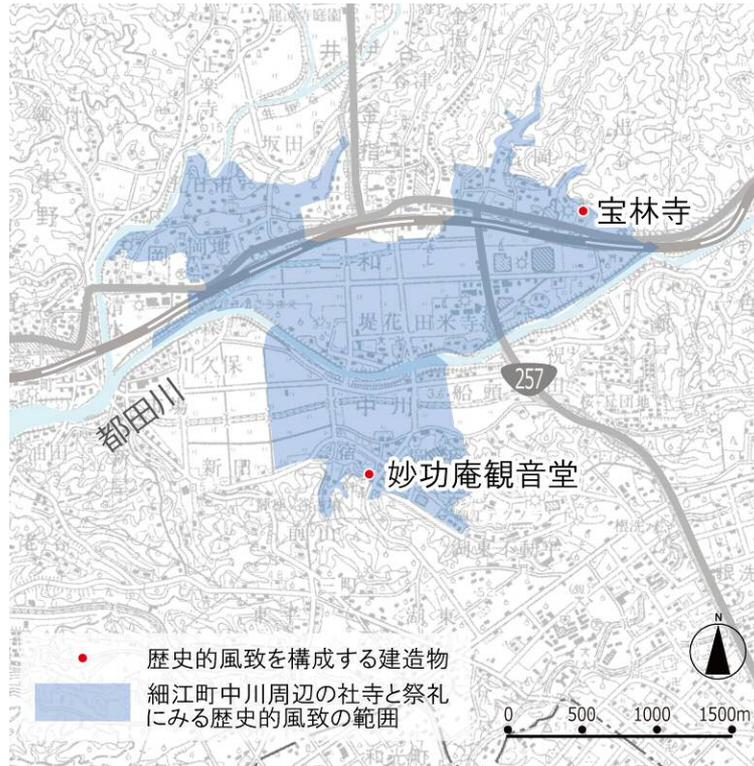


図2-7-96 細江町中川周辺の社寺と祭礼にみる歴史的風致の範囲

## (9)まとめ

奥浜名湖地域は、姫街道や旧金指街道といった街道がとおり、各地域との交流の足跡が多く残る地域であり、各々の地区では、信仰の伝播の歴史を物語る歴史のある社寺やそれらが存するまち並みと、奥浜名湖の表情豊かな自然の影響を受け、その地に根付いた信仰や伝統行事、産業や顕彰活動といったそれぞれの営みとが一体となり、郷土への愛着が感じられる良好な歴史的風致を形成している。

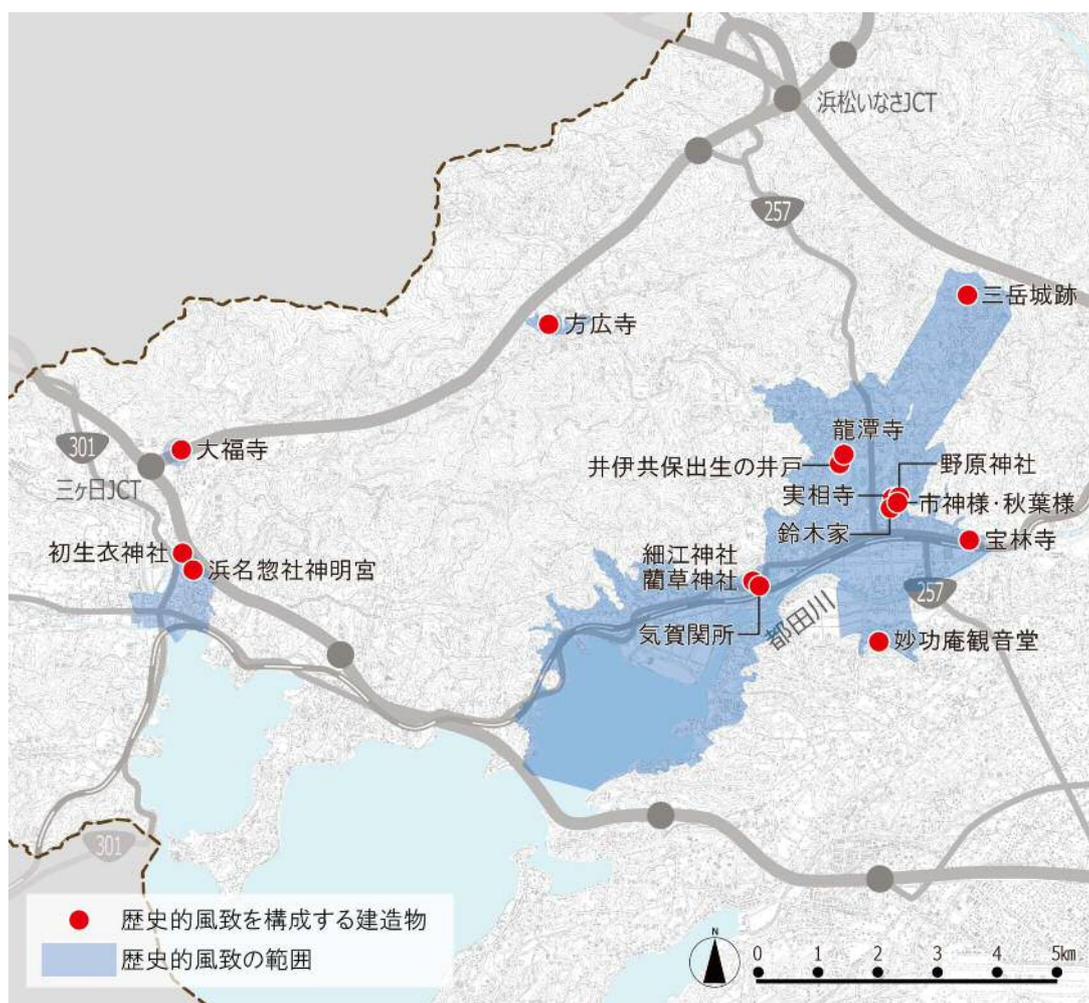


図2-7-97 奥浜名湖の社寺と祭礼にみる歴史的風致の範囲

まかやじ せんとうがみねじょうあと  
摩訶耶寺・千頭峯城跡

大福寺の位置する一帯の谷は、伊勢神宮の荘園がおかれた地域で、伊勢神宮と関連の深い浜名惣社神明宮と初生衣神社が位置し、初生衣神社付近から伸びる大福寺への参道は、途中で分岐して東に折れ、静岡県指定名勝の庭園を有する摩訶耶寺へと続く。摩訶耶寺も寺伝によると行基開創の奈良時代開基の古寺で、もと富幕山に新達寺があったが、のちに千頭峯に移されて真萱寺と号し、平安時代末に現在地へ移転した。

こうしたことから、大福寺と摩訶耶寺は、今でこそ別々の寺院であるが、その昔は同じ系列の寺院であったことがうかがえる。また、大福寺は姫街道と別所街道が交差する地点にあり、この交通の要所を守護する寺院としての一面が見て取れ、また、摩訶耶寺も、南北朝時代には背後の千頭峯に千頭峯城が築かれ、要衝の地に位置していたことがわかる。また、浜名惣社神明宮や伊勢神宮の荘園の存在も鑑みると、この谷一帯が神仏習合の一つの宗教世界を築いていたともいえる。

また、寛政 11 年(1799)に刊行された内山真龍の『遠江國風土記傳』には、大福寺だけでなく、摩訶耶寺についても、「納豆を献ず、大福寺に説く如し」との記載がある。今では、摩訶耶寺では浜納豆は作られていないが、かつては、摩訶耶寺からも大福寺と同様に納豆の献上が行われていたことをうかがい知ることができる。



図2-7-98 摩訶耶寺



図2-7-99 千頭峯城跡

みそまん

明治期ごろから、方広寺(奥山半僧坊)へ続く街道の茶屋では、こしあんを黒糖入りの皮で包んだまんじゅうが供されるようになった。

現在では奥浜名湖の名物となっているこの菓子は、茶色い見た目がみそに似ていることから「みそまん」と呼ばれるようになり、街道の往来により域内に広まった。現在では、三ヶ日・細江・引佐の9の製菓店を中心に、浜松地域ブランドとして販売に力を入れており、「みそまん物語」と命名して、各店のみそまんを揃えた、イベントの際に限定販売されるパック商品も人気を呼んでいる。



図2-7-100 みそまん物語

ちよつといっぴく  
コラム

## 金指地区の秋葉神社及び市神様の祭礼

慶長2年(1597)、近藤<sup>すえもち</sup>季用が安間清右衛門に金指に市を立てるように命じたと言われ、金指では3の日と8の日の月6回市が立ち、六斎市として繁盛した。

市が開かれた金指の町は、旧金指街道の坂の両側に、問屋や各種商店、旅館、料理屋などが並ぶ商業が盛んな町となり、このように栄えた金指の町は、市神様を祀って町の繁栄を祈り、火災のないことを祈って秋葉山を祀った。

現在、市神様と秋葉様を祀る金指10区・12区・14区では、1月の第2週または第3週の日曜日に、それぞれの区で例大祭が行われ、祠の周りに竹を4本立ててしめ縄を張り、お神酒などをお供えし、神主を呼んで全員で拝んでいる。例大祭は、かつては、1月8日に行われており、これは、領主の近藤氏が毎月8のつく日に市を開かせたことに因むのであろうという説もある。また、14区では、1月の例大祭に加え、毎月15日ごろの日曜日には、市神様に祭壇をつくり、住民各々がお参りできるようにしている。

なお、市神様は、早いところは江戸時代中ごろに、秋葉常夜灯と合祀されたと言われており、現在は通称で「秋葉さん」と呼ぶ住民も多いという。市神様と秋葉様のこの地での結びつきの強さは例大祭にも見て取れ、正月のうちに、交代で設けた当番のなかから2人が秋葉山にお参りに行ってお札を受けてきて、祭礼当日はそのお札を各区の祠に納めるとともに、希望する各戸に配っている。



図2-7-101 10区の祭礼の様子



図2-7-102 12区の祭礼の様子



図2-7-103 14区の祭礼の様子